

茨城県教育財団文化財調査報告第414集

愛宕山古墳群

旧水戸生涯学習センター解体撤去
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成28年3月

茨城県教育委員会
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第414集

あ た ご や ま
愛 宕 山 古 墳 群

旧水戸生涯学習センター解体撤去
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成28年3月

茨城県教育委員会
公益財団法人茨城県教育財団

序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県などの各事業者から委託を受けて、埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として、昭和52年に調査課が設置されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、旧水戸生涯学習センター解体撤去に伴って実施した愛宕山古墳群の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって、国指定史跡である愛宕山古墳を盟主とする古墳群の様相の一部が明らかになりました。

本書が、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者である茨城県教育庁生涯学習課に厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、水戸市教育委員会をはじめ、御指導、御協力いただきました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成28年 3月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 鈴木 欣一

例 言

- 1 本書は、茨城県教育庁生涯学習課の委託を受け、公益財団法人茨城県教育財団が平成26年度に発掘調査を実施した、水戸市愛宕町2,182番地に所在する^{あたごやま}愛宕山古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
調査 平成26年4月1日～5月31日
整理 平成27年11月2日～平成28年1月31日
- 3 発掘調査は、調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼班長 寺内久永
首席調査員 奥沢哲也
調査員 根本康弘
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長後藤一成のもと、調査員根本康弘が担当した。
- 5 本書の作成にあたり、古墳及び出土土器等については茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科教授田中裕氏にご指導・ご助言を賜った。
- 6 周溝の覆土の火山灰分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、考察は付章として巻末に掲載した。

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、 $X = + 44,080 \text{ m}$ 、 $Y = + 55,560 \text{ m}$ の交点を基準点（A 1 a1）とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C…、西から東へ 1, 2, 3… とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c…j, 西から東へ 1, 2, 3, …0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SI - 竪穴建物跡 SK - 土坑 TM - 古墳

遺物 DP - 土製品 M - 金属製品 Q - 石器・石製品 TP - 拓本記録土器

土層 K - 攪乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 繊維土器断面

 煤

● 土器

○ 土製品

□ 石器・石製品

△ 金属製品

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は m, cm, g で示した。なお、現存値は () を、推定値は [] を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

- 6 竪穴建物跡の「主軸」は、炉を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

- 7 今回の報告分で、整理段階で遺構名を変更したものは以下のとおりである。

変更 SK 1 → 第 1 号半地下式土坑 SK12 → 第 2 号半地下式土坑

- 8 今回調査した古墳は、水戸市教育委員会の遺跡台帳に基づき「TM5」から番号を付した。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
愛宕山古墳群の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	4
第2章 位置と環境	5
第1節 位置と地形	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の成果	11
第1節 調査の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	13
1 縄文時代の遺構と遺物	13
土坑	13
2 弥生時代の遺構と遺物	17
竪穴建物跡	17
3 古墳時代の遺構と遺物	18
古墳	18
4 江戸時代の遺構と遺物	28
(1) 土坑	28
(2) 半地下式土坑	29
5 その他の遺構と遺物	35
(1) 土坑	35
(2) 遺構外出土遺物	38
第4節 まとめ	43
付 章	47
写真図版	PL 1～8
抄 録	

あ た ご や ま 愛宕山古墳群の概要

遺跡の位置と調査の目的

愛宕山古墳群は、水戸市街地北部、那珂川右岸の標高約 30 m の上市台地上に立地しています。旧水戸生涯学習センター解体撤去工事に伴って失われる古墳の内容を図や写真に記録して保存するため、平成 26 年 4 月から 5 月までの 2 か月間、茨城県教育財団が発掘調査を実施しました。



調査の内容

調査では、古墳 3 基のほか、縄文時代の土坑 4 基、弥生時代の^{たてあな}竪穴建物跡 1 棟、江戸時代の土坑 1 基と半地下式土坑 2 基などが確認できました。主な出土遺物は、縄文土器（深鉢）、弥生土器（広口壺）、土師器（^{はじき}坏・甕）、土師質土器（小皿・鉢）、^{がしつ}瓦質土器（鉢・火鉢・^{しちりん}七厘）、陶器（碗・皿・^{はない}花生け）、磁器（碗・皿）、土製品（^{ぼうすいしゃ}紡錘車・^{つちにんぎょう}土人形・^{おきかまど}置竈）、人物埴輪、^{じんぶつはにわ}形象埴輪、^{けいしゅう}形埴輪、^{えんとう}円筒埴輪、石器（^{さつ}削



愛宕山古墳群全景（南東から）



調査区全景（東から）



第7号墳遺物出土状況



第5号墳調査風景



第7号墳全景

器・鎌・石匙・磨石・砥石), 石製品 (石剣・硯), 石核, 剥片, 銭貨 (寛永通寶) などです。

調査の成果

第5号墳は、内径約20mの円墳と考えられ、^{しゅうこう}周溝は幅2.25～3.30mで断面形は逆台形状です。時期は出土した土器から6世紀の前半頃と判断されます。第6号墳は、周溝の一部しか確認できませんでした。円墳と推定されます。時期は、重複関係から第5号墳よりも古いと考えられます。第7号墳は、内径約16mの円墳と考えられ、周溝は幅1.02～2.50mで断面形は逆台形状です。周溝内から埴輪の破片がたくさん出土しました。時期は6世紀中葉と判断されます。

第5号墳の周溝を、江戸時代後期の半地下式土坑が掘り込んでいました。3基の古墳は、この頃には^{さくへい}削平されていたと考えられます。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県は、東日本大震災によって水戸生涯学習センターの建物が大きな被害を受けたことから、その機能を旧県庁舎内に移転するとともに、建物を閉鎖して立ち入り禁止とした。その後、建物の解体工事を計画したが、工事の実施には隣接地の掘削工事が必要であった。

平成25年9月3日、茨城県教育委員会教育長（教育庁生涯学習課扱い）は、事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及び取扱いについて、茨城県教育委員会教育長（教育庁文化課扱い）あてに照会した。これを受けて、茨城県教育委員会教育長（教育庁文化課扱い）は平成25年9月10日に現地踏査を、平成25年9月20日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成25年9月27日、茨城県教育委員会教育長（教育庁生涯学習課扱い）あてに、事業地内に愛宕山古墳群が存在すること、その取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成26年2月3日、茨城県教育委員会教育長（教育庁生涯学習課扱い）は、茨城県教育委員会教育長（教育庁文化課扱い）に対して、文化財保護法第94条の規定に基づき、土木工事のために埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。平成26年2月21日、茨城県教育委員会教育長（教育庁文化課扱い）は茨城県教育委員会教育長（教育庁生涯学習課扱い）あてに、現状保存が困難であることから記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成26年2月24日、茨城県教育委員会教育長（教育庁生涯学習課扱い）は茨城県教育委員会教育長（教育庁文化課扱い）あてに、旧水戸生涯学習センター解体撤去に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。平成26年2月24日、茨城県教育委員会教育長（教育庁文化課扱い）は茨城県教育委員会教育長（教育庁生涯学習課扱い）あてに、愛宕山古墳群について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として、公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は、茨城県教育委員会教育長（教育庁生涯学習課扱い）から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成26年4月1日から5月31日まで発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

愛宕山古墳群の調査は、平成26年4月1日から5月31日にかけて実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程 \ 期間	4 月			5 月		
調査準備 表土除去 遺構確認	■					
遺構調査		■		■		
遺物洗浄 写真整理	■			■		
補足調査 撤収						■

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

愛宕山古墳群は、那珂川右岸の標高約 30 m の上市台地縁辺部に立地し、水戸市街地の北部の水戸市愛宕町 2,132 番地ほかに所在する全長 137 m の愛宕山古墳を中心とする数基の古墳からなっている。

水戸市は、北は那珂市、北東はひたちなか市、東は東茨城郡大洗町、南は東茨城郡茨城町、西は笠間市、北西は東茨城郡城里町と境を接している。

市域の地形は、北西部は城里町の鶏足山から延びる標高 70 ～ 100 m の丘陵が広がり、起伏に富む山林地帯となっている。その東部から南部にかけては、標高 30 ～ 37 m の広大な台地になっている。この台地は、那珂川支流の桜川・涸沼川によって刻まれ、那珂川と桜川に挟まれた上市台地及び桜川と涸沼川に挟まれた東茨城台地に分断されている。那珂川沿い、桜川が丘陵地から平地へ出る水戸市西部の常磐線沿線、那珂川と涸沼川の合流点付近には、それぞれ広い低地が形成されている。

上市台地の地質は、古生代の鶏足層を基盤とし、その上に下から第三紀層の泥岩からなる水戸層、第四紀層の粘土や砂で構成される見和層、段丘礫層の上市層、灰白色粘土の常総粘土層、関東ローム層の順に堆積している。低地部は、沖積谷に砂礫層が堆積し、場所によって有機質の黒色泥や草炭類の堆積が見られる¹⁾。

当古墳群の所在する台地は、上市台地の北東側縁辺部にあたり、台地のすぐ北東側に、那珂川が南東流し、低地が広がっている。上市台地と北東側の低地との境界は急崖になっており、比高は約 20 m である。

今回の調査地は、愛宕山古墳から南東へ約 300 m の地点で、当古墳群の東端部である。調査前の現況は、旧水戸生涯学習センター跡地（アスファルト敷きの駐車場）である。

第2節 歴史的環境

愛宕山古墳群の所在する水戸市には、旧石器時代から近世にかけて各時代の遺跡が確認されており²⁾、長い年月にわたって人々が活動したことが分かる。

旧石器時代では、十万原台地上のニガサワ遺跡、二の沢 B 遺跡、ドウゼンクボ遺跡で石器が採集されているほか、十万原遺跡では石器集中地点や集石土坑が確認されている³⁾。

縄文時代では、愛宕町遺跡〈2〉、アラヤ遺跡〈30〉、長者山遺跡、渡里町遺跡〈27〉などが台地の縁辺部に位置し⁴⁾、早い時期から集落が形成されていたことがうかがえる。『常陸國風土記』には巨人伝説と共に大串貝塚に関する記述がみられ、古代からその存在が知られていたことで名高い。また、愛宕町遺跡では、定角磨製石斧をはじめ角押文に代表される文様構成をもつ土偶が発見されており、中期阿玉台式期のものと判断される⁵⁾。そのほか、アラヤ遺跡では、晩期の高床住居跡と思われる柱穴が確認されており⁶⁾、この地域が古くから人々の生活に適した場所であったことを示している。

弥生時代では、那珂川流域の台地を中心に遺跡が確認されている。上市台地上では、十王台式土器が出土している堀遺跡、西原遺跡、文京二丁目遺跡〈25〉などがあげられる。

古墳時代の集落は、台地のやや奥まった部分にも確認されるようになる。遺跡としては、当古墳群、西原古墳群、台渡里官衛遺跡群〈28〉、向井原遺跡、仲根遺跡があげられる。特に、当古墳群の主墳である愛宕山古

墳は、石岡市舟塚山古墳、常陸太田市梵天山古墳に次ぐ県内3番目の規模で、全長137mの大型前方後円墳である。那賀国造の墓と考えられており、国指定史跡となっている。このほか、台渡里官衙遺跡群（南前原地区）では一辺が75mと推定される豪族居館跡に伴うと考えられる堀跡が発見されている⁷⁾。当古墳群は現在墳丘を確認できるのは愛宕山古墳と馬塚古墳の2基であるが、愛宕山古墳の東方約60m付近の現在は住宅地になっている箇所には、かつては全長58mの前方後円墳が存在し、「姫塚」と呼ばれていたという⁸⁾。

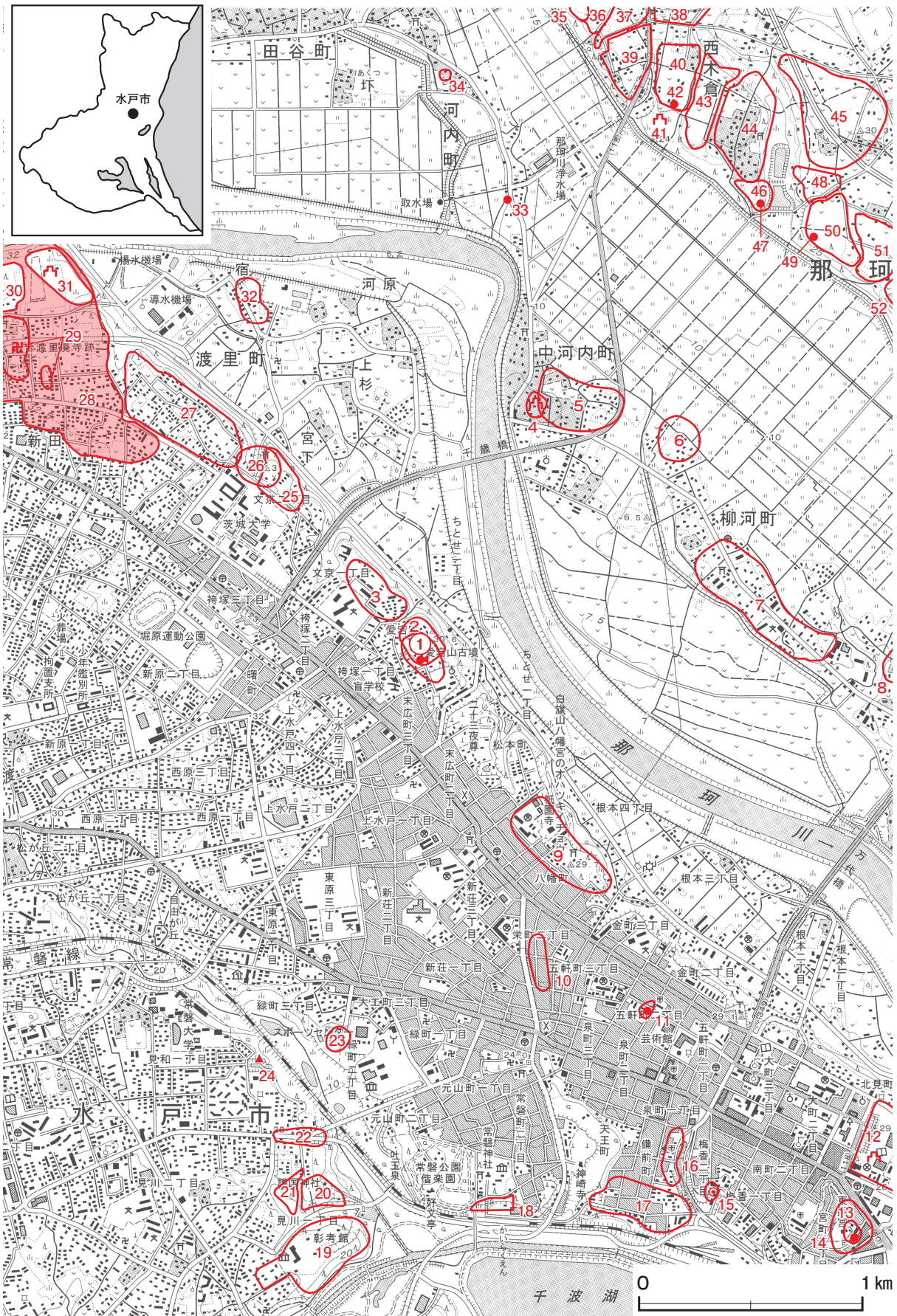
古墳時代終末期から奈良・平安時代の遺跡としては、国指定史跡である台渡里官衙遺跡群があげられる。長者山地区が那賀郡衙の正倉院に比定されており、観音堂山地区では7世紀後半、南方地区では9世紀後半の時期の寺院跡が確認されている（台渡里廃寺跡〈29〉）。さらに、当遺跡の北西4kmには、7世紀第3～4四半期の登り窯が2基確認された山田窯跡群がある。須恵器のほか瓦も出土しており、台渡里廃寺の創建を考える上で重要な遺跡である。そのほか、周辺にはアラヤ遺跡、長者山遺跡、渡里町遺跡、西原遺跡、堀遺跡、文京二丁目遺跡等が確認されており、那賀郡衙及びその関連遺跡として捉えられている⁹⁾。

平安時代から中世にかけては、この地域は常陸大掾氏や江戸氏、佐竹氏の抗争の舞台となった。鎌倉時代末に常陸大掾馬場資幹が上市台地東端部に館を築き、馬場城と呼ばれた。後の水戸城跡〈12〉である。当時は大掾氏の本拠地は府中（現在の石岡市）であり、当時の水戸城は支城として規模も小さかったと考えられている。その後、応永三十三年（1426）、大掾満幹が府中で行われる青屋祭のために城を留守にしたすきをねらい、河和田城にあった江戸通房が城を奪い、その後165年にわたってこの地を支配することとなった。この間に、江戸氏は城の規模を拡張したとみられる。天正十八（1590）年には、太田城にあった佐竹氏が水戸城を攻略し、太田城に代わって水戸城を常陸支配の本拠とした。佐竹氏は、城を拡張・整備するだけでなく城下の整備も進めた。佐竹氏の秋田転封後は徳川氏がこれに代わり、さらに城や城下の整備が進められ、現在の水戸市街地の骨格が形成されることになる。

※ 文中の〈 〉内の番号は、第1図表中の該当遺跡番号と同じである。なお、本章は、財団報告書第329・341集を基に加筆・編集したものである。

註

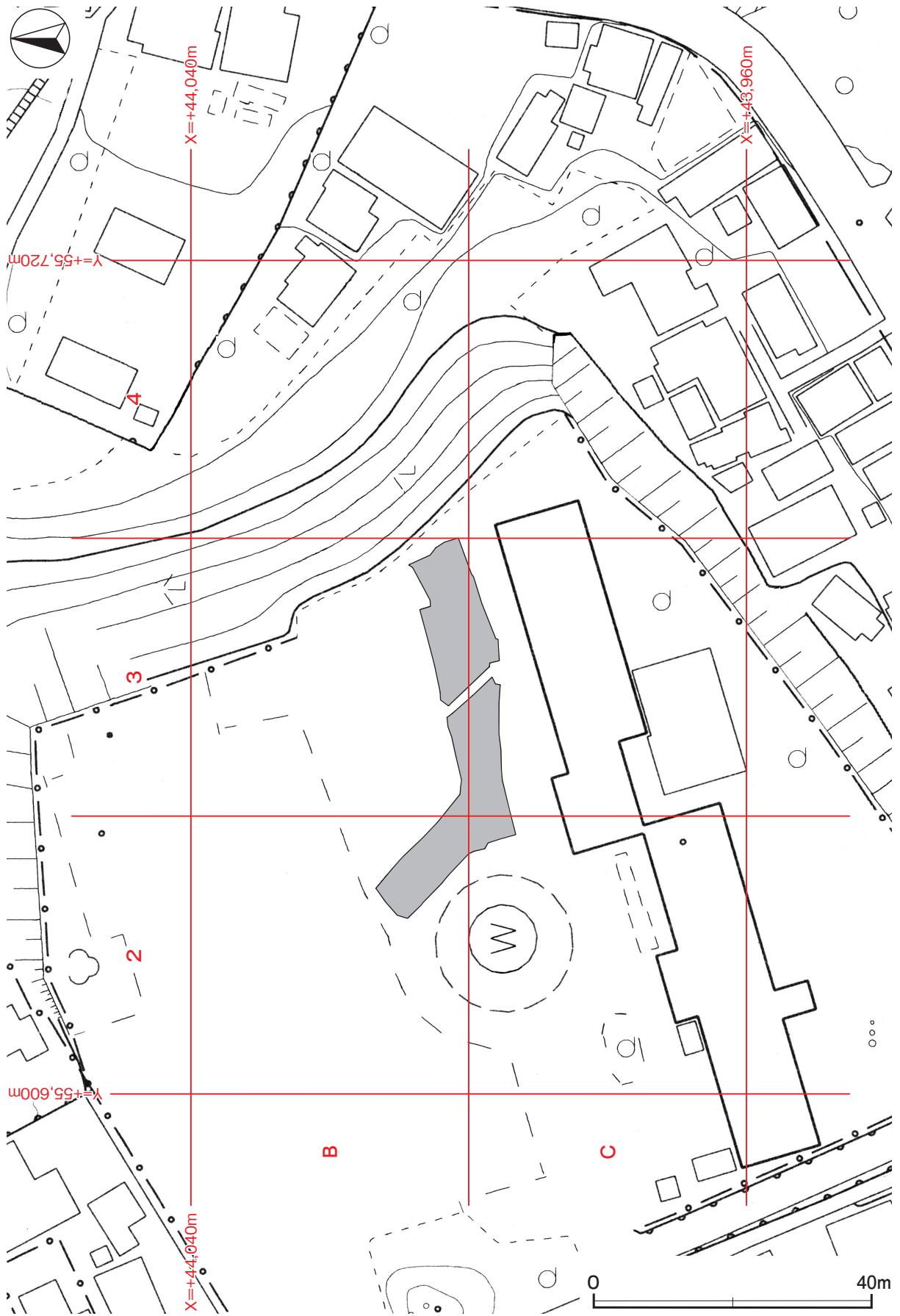
- 1) 水戸市史編さん委員会『水戸市史 上巻』水戸市 1963年10月
- 2) 茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地名表・地図編）』茨城県教育委員会 2001年3月
- 3) 皆川修「十万原地区市街地開発事業地内市街地開発事業地埋蔵文化財調査報告書 十万原遺跡」『茨城県教育財団 文化財調査報告』第179集 2001年3月
- 4) 註1に同じ
- 5) 郡司良一『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書（昭和58年度版）』水戸市教育委員会 1984年3月
- 6) 註5に同じ
- 7) 茨城大学人文学部考古学研究室「常陸国那賀郡家周辺遺跡の研究－報告編－」『茨城大学人文学部考古学研究報告』11冊 2014年3月
- 8) 註1に同じ
- 9) 佐々木藤雄他「台渡里廃寺跡－市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）－」『水戸市埋蔵文化財報告書』第4集 水戸市教育委員会 2006年3月



第1図 愛宕山古墳群周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000分の1「水戸」）

表1 愛宕山古墳群周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
①	愛宕山古墳群				○				27	渡里町遺跡		○		○	○		
2	愛宕町遺跡		○	○	○				28	(国)台渡里官衙遺跡群		○	○	○	○	○	○
3	文京一丁目遺跡		○	○	○	○			29	台渡里廃寺跡					○		
4	中河内館跡						○		30	アラヤ遺跡		○		○	○		
5	中河内遺跡				○	○			31	長者山城跡						○	
6	上坪遺跡			○	○	○			32	坏渡里遺跡				○	○		
7	柳河町遺跡			○	○	○			33	一本松古墳				○			
8	反町遺跡			○	○				34	上河内大塚古墳					○		
9	茨城高等学校遺跡		○			○			35	西木倉古墳群				○			
10	並松町遺跡		○						36	入遺跡		○	○	○	○	○	
11	五軒町古墳群				○				37	西木倉塙後遺跡		○	○	○	○		
12	水戸城跡					○	○	○	38	久保山遺跡		○		○	○		
13	東照宮境内古墳群				○				39	西木倉塙遺跡		○		○	○		
14	東照宮境内遺跡			○					40	西戸遺跡		○	○	○	○	○	
15	梅香火葬墓跡					○			41	西木倉館跡						○	
16	幸町遺跡		○						42	狐塚古墳				○			
17	釜神町遺跡		○						43	西木倉前原遺跡		○		○	○		
18	七面製陶所跡							○	44	東木倉遺跡		○	○	○	○		
19	見川塚畑遺跡		○	○				○	45	竹の越遺跡		○					
20	植松遺跡	○	○	○	○				46	東木倉塙遺跡			○	○	○		
21	横西遺跡					○			47	東木倉古墳群				○			
22	坂上遺跡				○				48	稲荷前遺跡			○				
23	東町遺跡				○	○			49	羽黒前古墳群				○			
24	囲裏窯跡							○	50	羽黒前遺跡	○	○	○	○	○		
25	文京二丁目遺跡			○	○	○			51	息栖遺跡		○		○	○		
26	笠原神社古墳		○		○				52	中台新地遺跡		○	○	○	○	○	

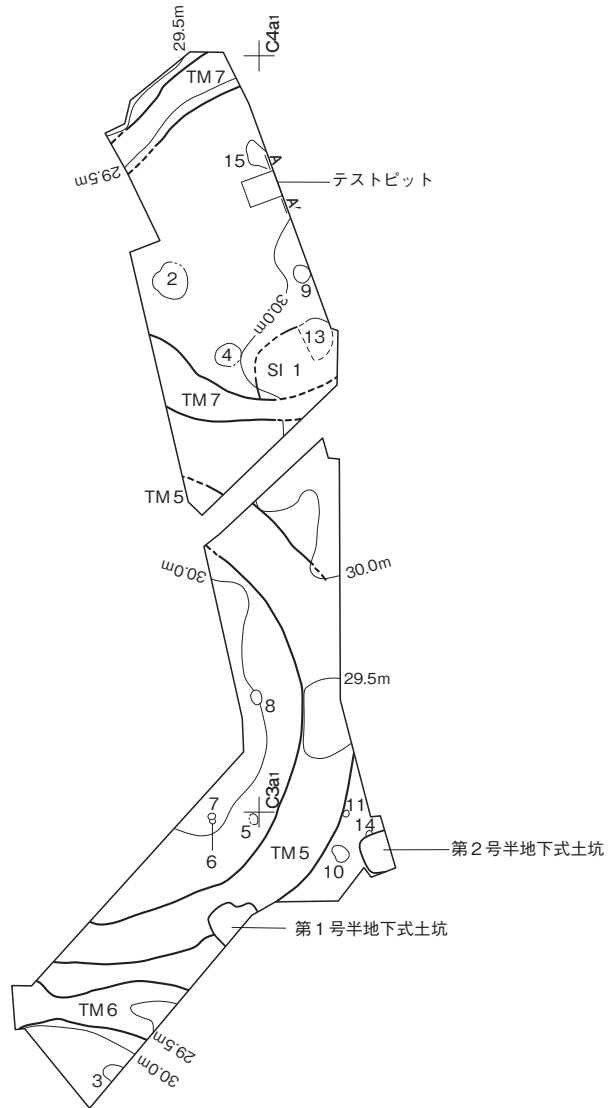


第2図 愛宕山古墳群調査区設定図（水戸市都市計画図 2,500 分の 1 より作成）



X=+44,016m | B4g4
Y=+55,692m

| C4fa



X=+44,016m | B2g6
Y=+55,620m

X=+43,980m | C2f6
Y=+55,620m



第3図 愛宕山古墳群遺構全体図

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

愛宕山古墳群は、水戸市の北部に位置し、那珂川右岸の標高約 30 mの上市台地北東側縁辺部に立地している。古墳群の北東側に那珂川と低地を望み、南西側から南には上市台地が広がっている。古墳群の範囲は、東西約 400 m、南北約 300 mにわたっている。先述したように、現在墳丘を確認できるのは2基である。調査区域は、愛宕山古墳の南東約 200 m、東西約 60 m、南北約 30 mの「L」字状の範囲で、調査面積は 617㎡である。周辺の地形から、古墳群の東端部付近に位置するものと判断される。

調査の結果、古墳3基（古墳時代）、竪穴建物跡1棟（弥生時代）、土坑13基（縄文時代4、江戸時代1、不明8）、半地下式土坑2基（江戸時代）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に10箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、弥生土器（広口壺）、土師器（坏・甕）、土師質土器（小皿・鉢）、瓦質土器（鉢・火鉢・七厘）、陶器（碗・皿・花生け）、磁器（碗・皿）、土製品（紡錘車・土人形・置竈）、人物埴輪、形象埴輪、円筒埴輪、石器（削器・鏃・石匙・磨石・砥石）、石製品（石剣・硯）、石核、剥片、銭貨（寛永通寶）などである。土器・埴輪は全て破片で、陶磁器は完存率の高いものが多い。

第2節 基本層序

調査区の東部（C3a9区）にテストピットを設定し、地表面からの深さ2.2mまで掘り下げて基本層序の確認を行った（第4図）。土層は13層に分層でき、観察の結果は以下の通りである。

第1層は、コンクリートブロックと砂利の攪乱層である。層厚は30～40cmである。

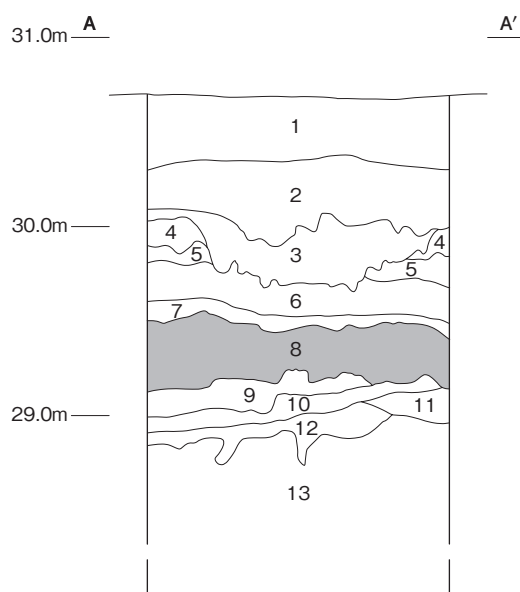
第2層は、極暗褐色を呈する攪乱層で硬く締まっており、建物の建設に際して整地・転圧されたものと判断される。層厚は20～50cmである。

第3層は褐色を呈し、白色粒子微量を含みやや粘性を帯び硬く締まっている。第3層が、第4・5層を突き抜けて第6層まで落ち込んでいることから、風倒木のような古い攪乱が加わっているものと判断される。層厚は、6～38cmである。

第4層はにぶい黄褐色を呈し、白色粒子微量を含み、やや粘性を帯び硬く締まっている。層厚は、14～18cmである。

第5層は赤褐色を呈し、白色粒子中量、赤褐色粒子微量を含み、粘性が弱い。10～40cmの層厚を有する。今市・七本桜軽石層に相当するものと判断される。

第6～10層は、ハードローム層である。いずれも粘性は強く、硬く締まっている。



第4図 基本土層図

第6層は黄褐色を呈し、白色粒子を微量含み、層厚は15～20cmである。

第7層は黄褐色を呈し、黒色粒子を微量及び始良丹沢火山灰(AT)を含んでいる。層厚は5～15cmである。

第8層は褐色を呈し、黒色粒子を微量含み、層厚は25～40cmである。第2黒色帯に相当する層と考えられる。

第9・10層は、鹿沼パミスを含むローム層である。

第9層は褐色を呈し、鹿沼パミスを少量含み、層厚は10～15cmである。

第10層は褐色を呈し、鹿沼パミスを中量含み、層厚は5～10cmである。

第11層は、明黄褐色を呈する鹿沼軽石層である。粘性は弱く、硬く締まっており、層厚は15～23cmである。

第12層は、黄褐色を呈するハードローム層である。白色粒子を微量含み、粘性が強く硬く締まっている。層厚は、10～18cmである。

第13層は褐色を呈するハードローム層で、目立った含有物は認められない。層厚は40cmまで確認したが、以下は掘削していないので不明である。

なお、遺構は第3層上面で確認した。

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、土坑4基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

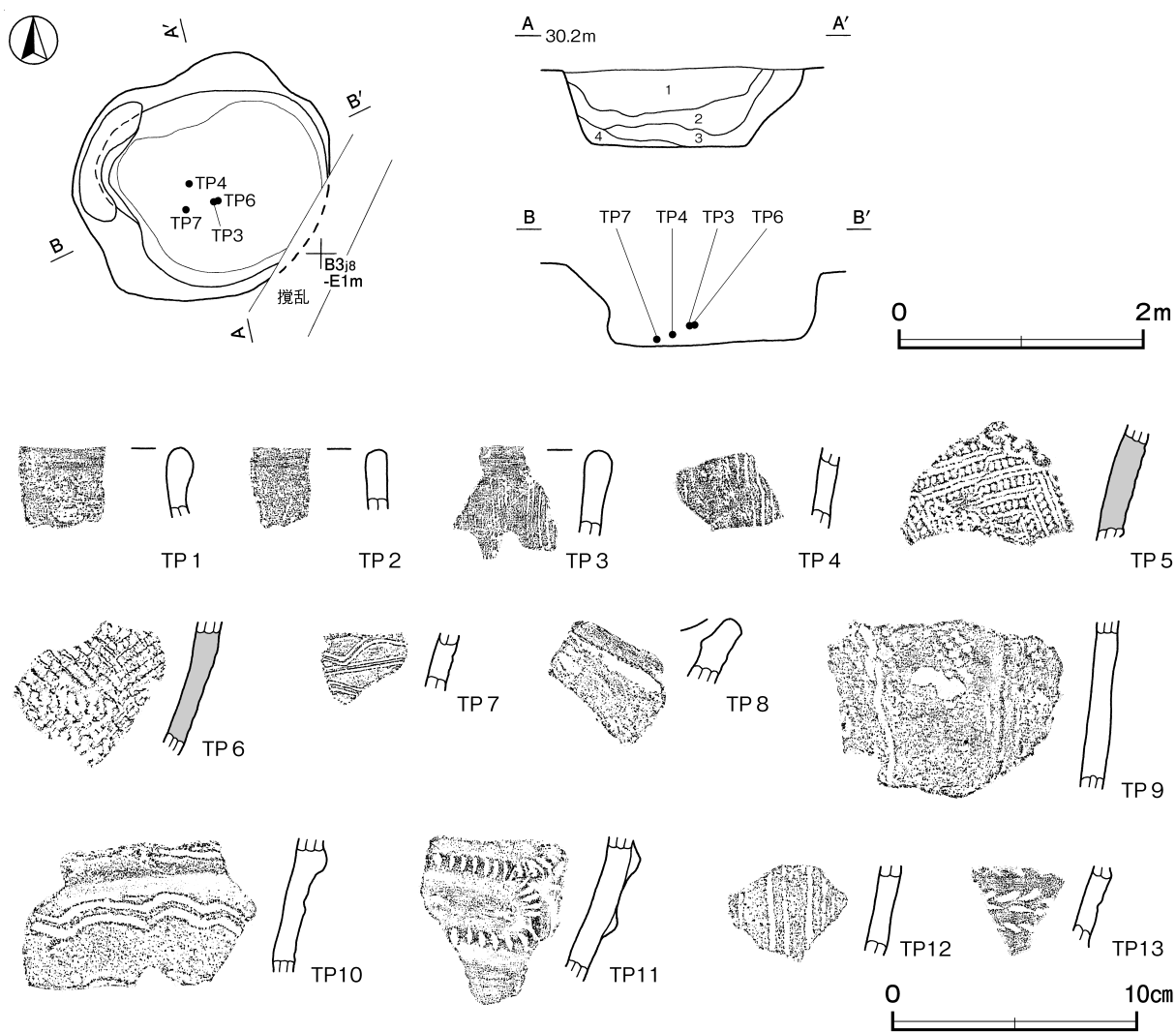
土坑

第2号土坑（第5図）

位置 調査区東部のB318区、標高約30mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第7号墳に掘り込まれている。

規模と形状 長径2.06m、短径2.00mの不整形円形である。底面はほぼ平坦で、壁は西部ではやや内彎しながら立ち上がり、東部ではほぼ直立している。深さは、西側では60～70cm、東側では約50cmである。南東側は、電線埋設工事により攪乱されている。



第5図 第2号土坑・出土遺物実測図

覆土 4層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

- 1 極暗褐色 白色粒子少量, ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 縄文土器片 45点 (深鉢) が出土している。TP 3・TP 6は覆土中層から, TP 4・TP 7は覆土下層から, それぞれ出土している。埋没していく過程で投棄されたと考えられる。

所見 形状から貯蔵穴と考えられる。時期は, TP 7が覆土下層から出土しているため, 前期中葉と考えられる。

第2号土坑出土遺物観察表 (第5図)

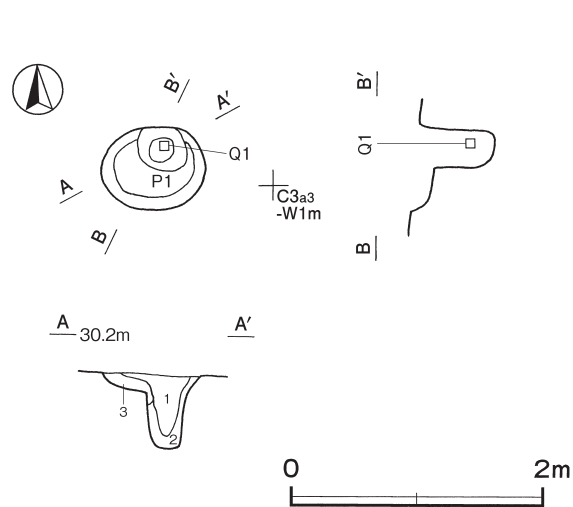
番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP 1	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐	口縁部はわずかに肥厚 撚糸文(無節縄文R)を縦位に施文	覆土中	
TP 2	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	口縁部はわずかに肥厚 撚糸文(無節縄文R)を縦位に施文	覆土中	
TP 3	縄文土器	深鉢	長石・石英	明褐	口縁部はやや肥厚して外反 撚糸文(無節縄文L)を縦位に施文	覆土中層	PL 6
TP 4	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	撚糸文(無節縄文R)を縦位に施文	覆土下層	
TP 5	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にぶい黄橙	LとRの異条の縄を回転押圧して羽状構成	覆土中	PL 6
TP 6	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	褐	無節の縄と0段多条による単節の縄を横位・縦位に回転させて羽状構成	覆土中層	
TP 7	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	細い半截竹管による横位 弧状の沈線文	覆土下層	
TP 8	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・細礫	赤褐	口縁外面に棒状工具による押圧 口縁内側に段	覆土中	
TP 9	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・細礫	橙	棒状工具による縦位の蛇行沈線と断面三角形の低い隆帯間に単節縄文LR	覆土中	
TP10	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・細礫	暗褐	横位の隆帯上部に棒状工具による連続押圧文 下位に半截竹管による蛇行する平行沈線文	覆土中	
TP11	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・細礫	にぶい赤褐	楕円形に区画する隆帯上にヘラ状工具による刻み目	覆土中	
TP12	縄文土器	深鉢	長石・石英・細礫	暗褐	半截竹管による縦位の連続刺突文	覆土中	
TP13	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	半截竹管による横位の刺突文・連続爪形文	覆土中	

第8号土坑 (第6・7図)

位置 調査区中央部北寄りのB 3j2区, 標高約 30 mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第5号墳に掘り込まれている。

規模と形状 長径 0.82 m, 短径 0.66 mの楕円形で, 長径方向は N - 72° - W である。底面は平坦で, 壁は外傾して立ち上がっている。深さは 14cmである。北部に深さ 60cmのピットが掘られている。



覆土 3層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

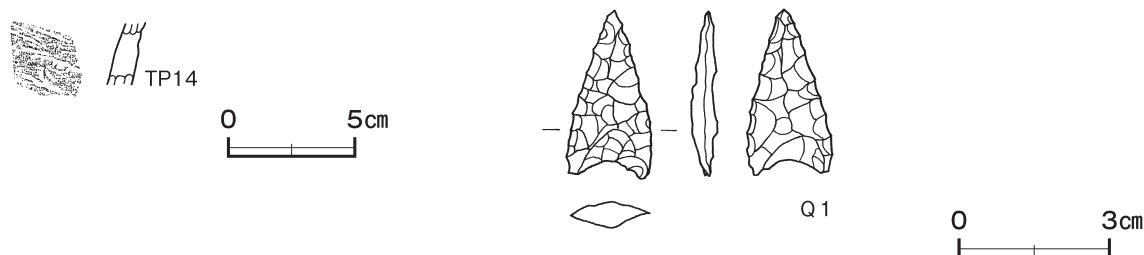
土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物少量
- 2 暗褐色 ロームブロック多量, 炭化物中量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 縄文土器片 2点 (深鉢), 石器 1点 (鏃) が出土している。Q 1は, ピットの覆土下層から出土しており, 埋め戻される段階で投棄されたと考えられる。

所見 性格は不明である。時期は, 出土土器から前期中葉と考えられる。

第6図 第8号土坑実測図



第7図 第8号土坑出土遺物実測図

第8号土坑出土遺物観察表 (第7図)

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP14	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄橙	半截竹管による平行沈線と連続爪形文	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	鏃	3.3	1.7	0.5	2.1	頁岩	両面押圧剥離 凹基無茎鏃	覆土下層	PL 8

第10号土坑 (第8図)

位置 調査区南西部のC 2 b0区, 標高約30 mの台地縁辺部に位置し, 第5号墳の周溝の南西側0.30 mに構築されている。

規模と形状 長径1.12 m, 短径0.97 mの楕円形で, 長径方向はN - 68° - Eである。底面はロームで, 皿状である。壁は外傾し, 緩やかに立ち上がっている。深さは, 北側では約50 cm, 東側では約40 cmである。

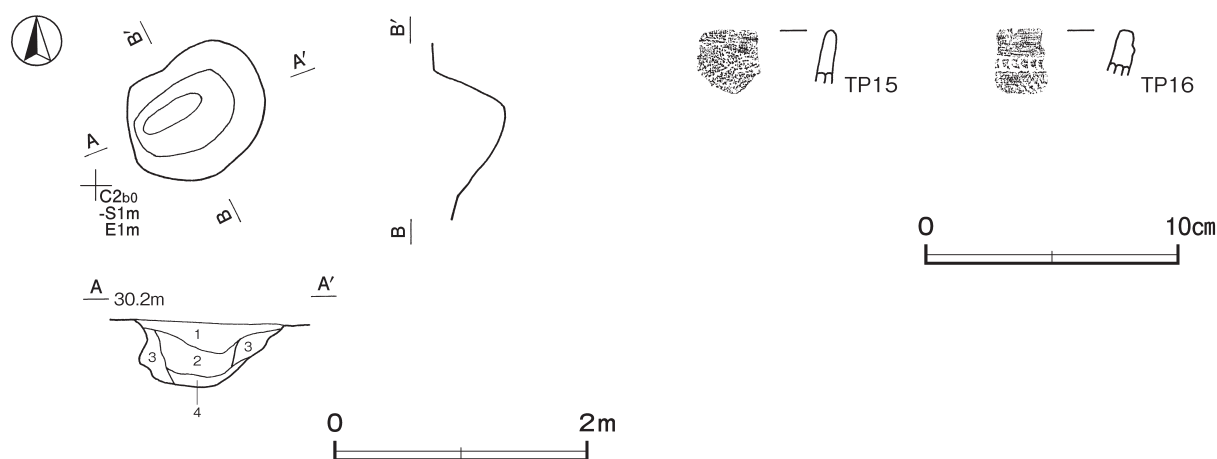
覆土 4層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-----------------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量, 鉄分微量 | 3 黒褐色 ロームブロック多量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量, 鉄分少量 | 4 暗褐色 ロームブロック多量 |

遺物出土状況 縄文土器片6点(深鉢)が出土している。いずれも埋め戻す過程で投棄あるいは混入したものと思われる。

所見 性格は不明である。時期は, 出土土器から前期後葉と考えられる。



第8図 第10号土坑・出土遺物実測図

第 10 号土坑出土遺物観察表（第 8 図）

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP15	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	撚糸文（無節縄文R）を斜位に施文	覆土中	
TP16	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	口唇直下に半截竹管による横位の連続爪形文 RL 下位に単節縄文	覆土中	

第 15 号土坑（第 9 図）

位置 調査区南西部の B 3j9 区，標高約 30 m の台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 7 号墳に掘り込まれている。

規模と形状 南部が調査区域外に伸びているため，長径は 1.31 m で，短径は 0.80 m しか確認できなかった。不整楕円形と推定され，長径方向は N - 73° - E である。底面は，西に向かってわずかに下がっており，壁は緩やかに立ち上がっている。深さは，東側では約 5 cm，西側では約 10 cm である。

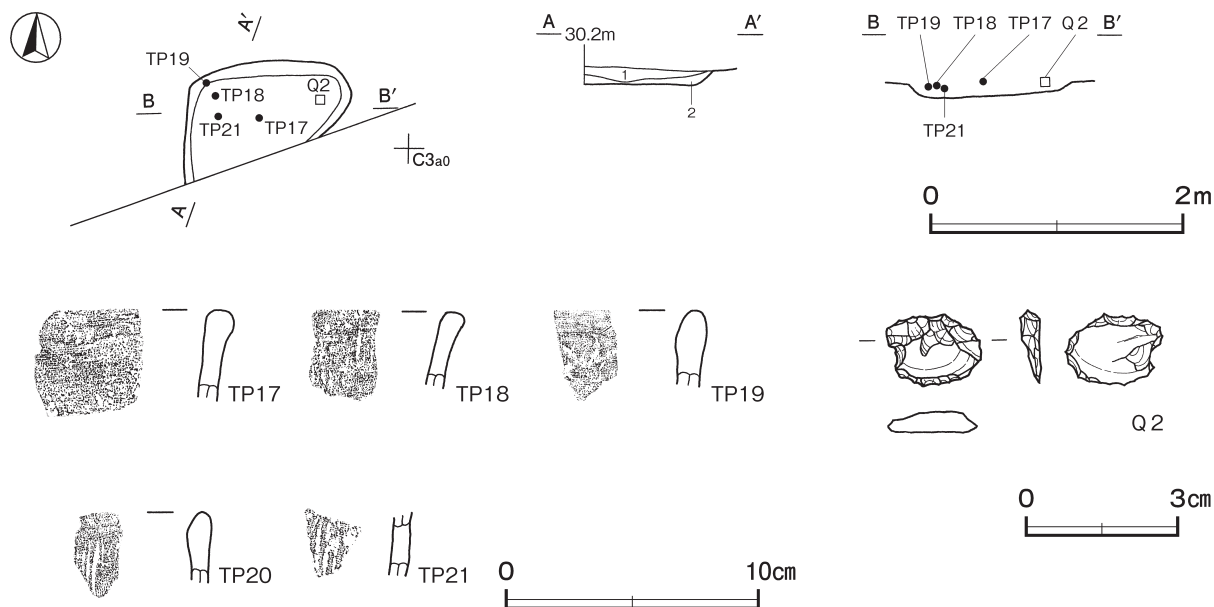
覆土 2 層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

- 1 褐色 ロームブロック少量，暗褐色粒子微量 2 褐色 ロームブロック中量，黒色粒子少量

遺物出土状況 縄文土器片 13 点（深鉢），石器 1 点（削器）が出土している。いずれも，埋め戻される段階で投棄されたと考えられる。

所見 性格は不明である。時期は，出土土器から早期前葉と考えられる。



第 9 図 第 15 号土坑・出土遺物実測図

第 15 号土坑出土遺物観察表（第 9 図）

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP17	縄文土器	深鉢	長石・石英・細礫	にぶい橙	口縁部は肥厚して外反 撚糸文（無節縄文R）を縦位に施文	覆土上層	PL 6
TP18	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	口縁部はやや肥厚して外反 撚糸文（無節縄文R）を縦位に施文	覆土下層	

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP19	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	口縁部は肥厚して直立 撚糸文（無節縄文L）を縦位に施文	覆土下層	
TP20	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	口縁部はわずかに肥厚して直立 撚糸文（無節縄文R）を縦位に施文	覆土中	
TP21	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐	やや太目の縄による縦位の撚糸文	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 2	削器	1.4	1.9	0.4	1.0	黒曜石	片面のみ調整 側縁押圧剥離調整	覆土上層	PL 8

表2 縄文時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
2	B 3 i 8	-	不整円形	2.06 × (2.00)	70	平坦	内彎直立	自然	縄文土器片	本跡→TM 7
8	B 3 j 2	N - 72° - W	楕円形	0.82 × 0.66	60	平坦	外傾	人為	縄文土器片 鏃	本跡→TM 5
10	C 2 b 0	N - 68° - E	楕円形	1.12 × 0.97	50	皿状	外傾	人為	縄文土器片	
15	B 3 j 9	N - 73° - E	[不整楕円形]	1.31 × (0.80)	10	平坦	緩斜	人為	縄文土器片 削器	本跡→TM 7

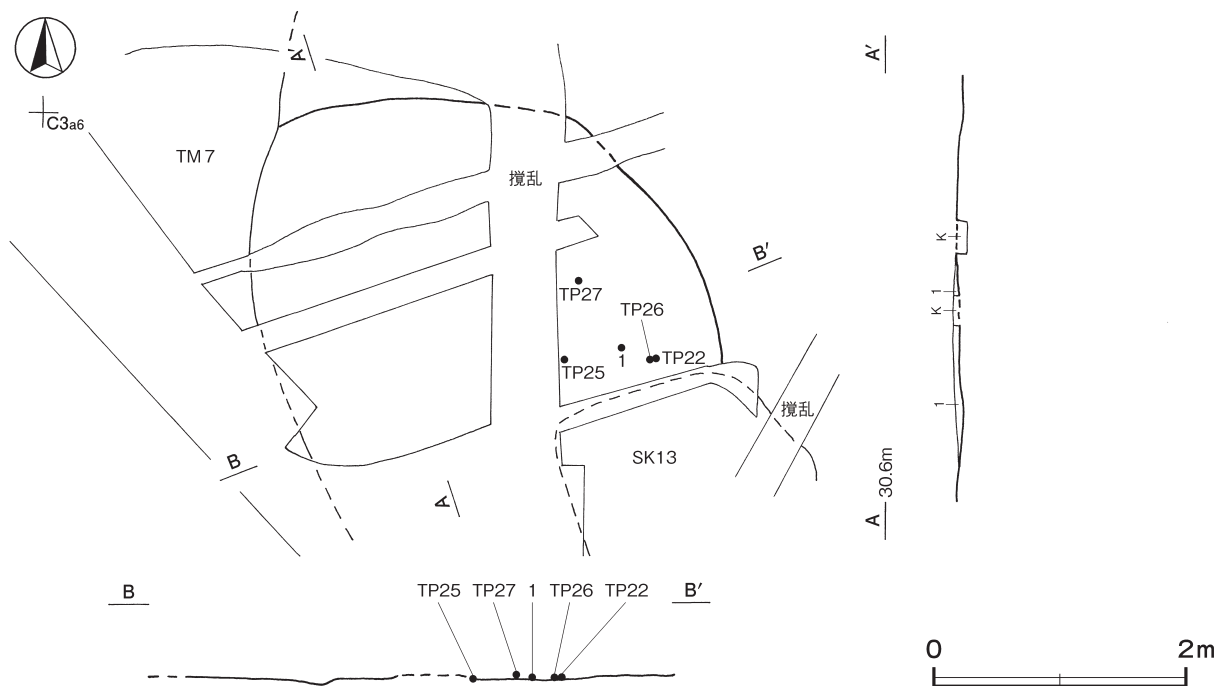
2 弥生時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡1棟を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

竪穴建物跡

第1号竪穴建物跡（第10・11図）

位置 調査区東部のC 3 a 6区、標高約30mの台地縁辺部に位置している。



第10図 第1号竪穴建物跡実測図

重複関係 第7号墳の周溝に掘り込まれているほか、数か所に攪乱を受けている。第13号土坑と重複しているが、攪乱のため新旧関係は不明である。

規模と形状 攪乱のため、東西軸は3.35mで、南北軸は2.75mしか確認できなかった。隅丸方形と推定できるが、明確ではない。

床 ほぼ平坦である。あまり踏み固められていない。

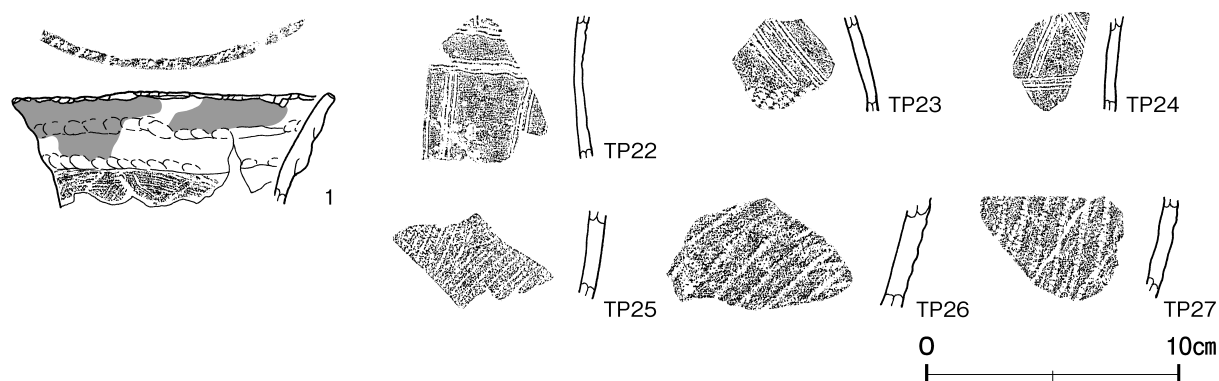
覆土 単一層である。堆積状況は不明である。

土層解説

1 極暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 弥生土器片9点(広口壺), 自然礫2点のほか、縄文土器片1点(深鉢)が、床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期前半と考えられる。



第11図 第1号竪穴建物跡出土遺物実測図

第1号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第11図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	弥生土器	広口壺	12.5	(4.6)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	複合口縁下端に指頭押圧 下位はハケ状工具で横位・斜位の調整 口唇部に異段の縄文	床面	煤付着 10% PL 4
TP22	弥生土器	広口壺	長石・石英			にぶい橙			3本櫛歯による横位・縦位の櫛描文	床面	PL 6
TP23	弥生土器	広口壺	長石・石英・細礫			灰褐			胴部はLR単節縄文(太い縄の横回転) 頸部は3本櫛歯による斜位の櫛描文	床面	PL 6
TP24	弥生土器	広口壺	長石・石英			灰褐			3本櫛歯による山形文	床面	PL 6
TP25	弥生土器	広口壺	長石・石英・細礫			明赤褐			R無節の細い縄による附加条一種(附加1条) 回転押圧 条の間隔はやや狭い	床面	PL 6
TP26	弥生土器	広口壺	長石・石英			橙			R無節の太い縄による附加条二種(附加1条) 回転押圧 条の間隔は広い	床面	
TP27	弥生土器	広口壺	長石・石英・赤色粒子			橙			R無節の太い縄による附加条二種(附加1条) 回転押圧 条の間隔は広い	床面	PL 6

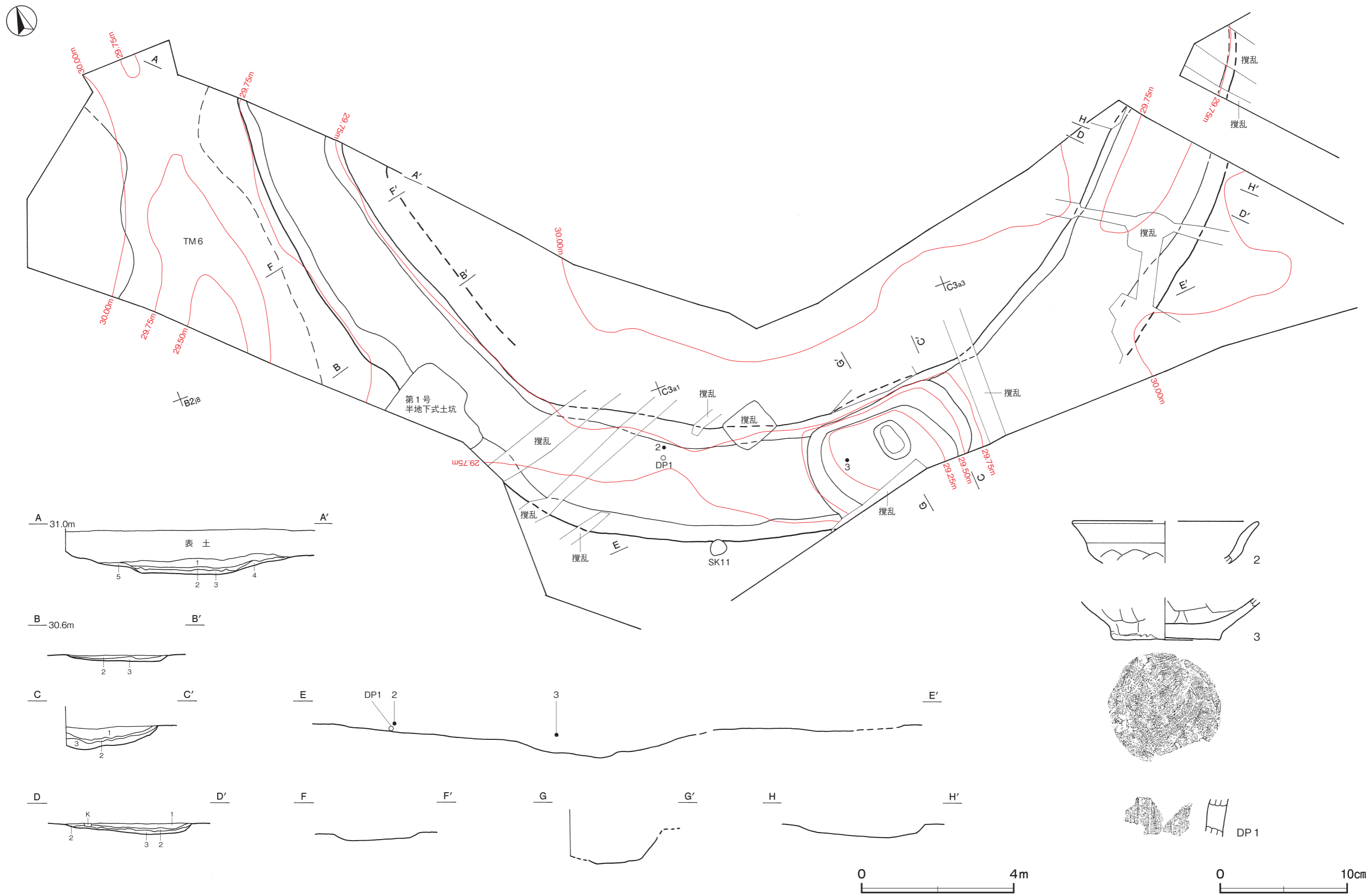
3 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、古墳3基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

古墳

第5号墳 (第12図)

位置 B 2 h8 ~ C 3 b5 区, 標高約 30 mの台地縁辺部に位置し、第6号墳の東側に近接している。



第12图 第5号墳・出土遺物实测图

確認状況 L字状の調査区内において、周溝の南西部を検出した。墳丘は削平されており、周溝のみを確認した。

重複関係 第1号半地下式土坑、第11号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 墳丘は失われており、埋葬施設も不明である。調査した周溝部分の形状から、円墳と考えられ、規模は内径約20m、外径約26mと推定できる。西端部はやや直線的であり、第6号墳の周溝を意識的に避けて掘り込まれたと考えられる。

周溝 確認面での幅は、広い部分で3.30m、狭い部分で2.25mである。底面は、広い部分で2.54m、狭い部分で1.50mである。断面形は逆台形状を呈し、確認面からの深さは約30cmと比較的浅いが、南部は周囲よりも深く掘り込まれており、85cmに達する。

覆土 5層に分層できる。周囲から土砂が流れ込んだ堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|----------------|
| 1 黒色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 2 黒色 | ロームブロック中量、焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 土師器片2点（坏、甕）、円筒埴輪片1点のほか、縄文土器片347点（深鉢）、弥生土器片118点（広口壺）、自然礫19点が東部を中心とする覆土中から出土している。

所見 時期は、周溝から出土した出土土器から6世紀前半に比定でき、本跡が築造される以前に、第6号墳が築造されていたものと判断される。

第5号墳出土遺物観察表（第12図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
2	土師器	坏	[14.6]	(3.3)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面磨き	覆土中層	5%
3	土師器	甕	-	(3.3)	8.8	長石・石英	にぶい黄褐	普通	体部外面ナデ 内面ヘラナデ 底部多方向のヘラ削り	覆土中層	10%

番号	器種	径	器高	底径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 1	円筒埴輪	-	(3.0)	-	(30.9)	長石・石英	にぶい橙	外面縦ハケ 内面指ナデ 透孔あり	覆土下層	PL 8

第6号墳（第13図）

位置 調査区西端のB 2g7～B 2j8区、標高約30mの台地縁辺部に位置し、第5号墳の西側に近接している。

確認状況 確認できたのは周溝東端の一部で長さ約9mだけである。

重複関係 本跡の周溝を避けて、第5号墳の周溝が掘り込まれている。

規模と形状 周溝の大部分は調査区域外となっており、全体の規模をはじめ、墳丘や埋葬施設は不明である。確認した周溝がわずかに屈曲しているので、円墳の可能性がある。

周溝 確認された範囲では、上幅2.10～5.84m、下幅0.50～1.34m、深さは17～73cmである。断面形は、浅いU字状を呈しているが底面は凹凸がある。北部は、やや浅くなっており、幅も狭い。そこから南北に向かって、幅が広がっている。

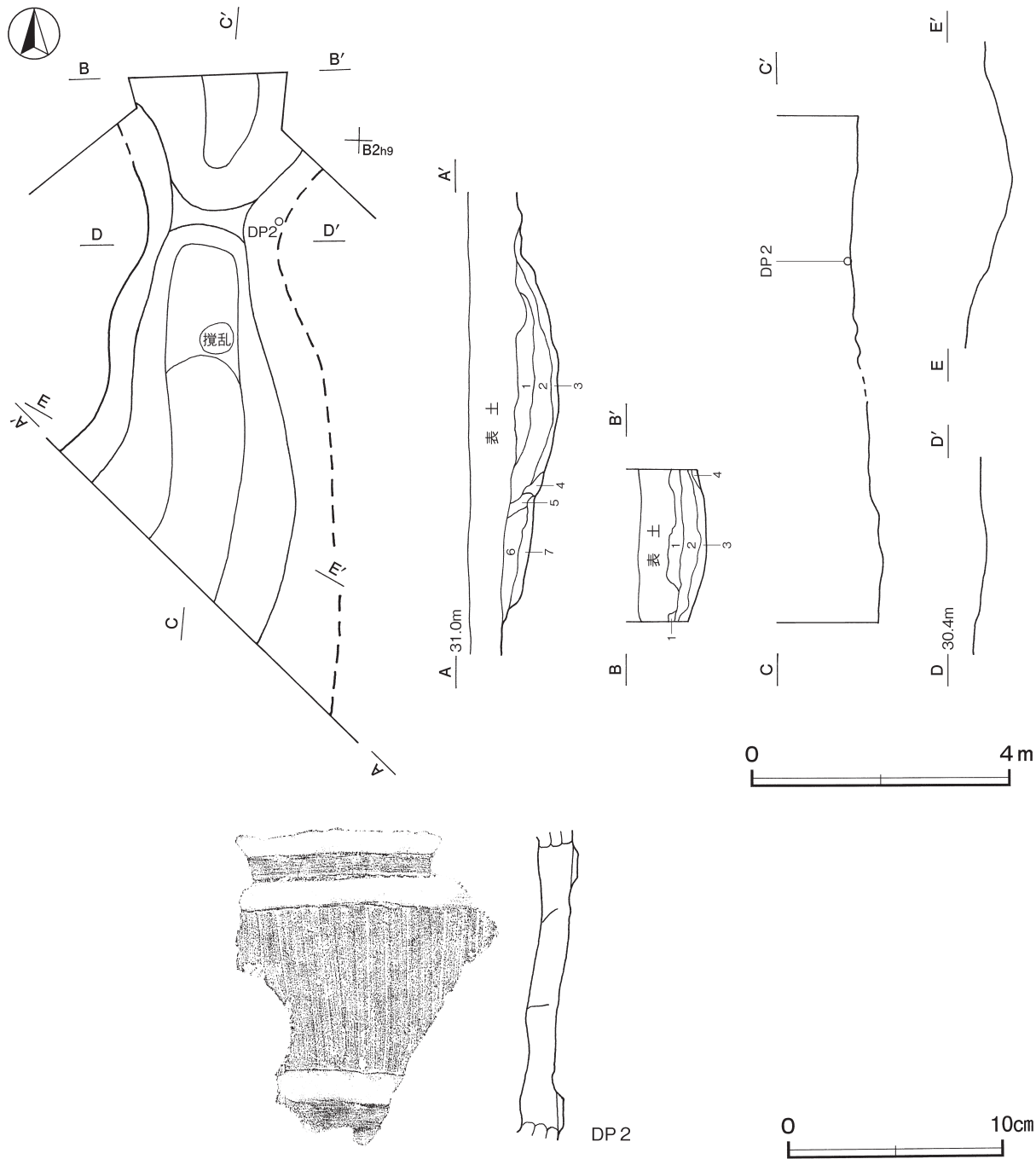
覆土 7層に分層できる。周囲から土砂が流れ込んだ堆積状況であることから、自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-----------|
| 1 黒色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 5 黒色 | ローム粒子微量 |
| 2 黒色 | ロームブロック中量、炭化粒子・焼土粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック多量 | | |

遺物出土状況 円筒埴輪片 1 点のほか、縄文土器片 15 点（深鉢）、弥生土器片 21 点（広口壺）、須恵器片 1 点（甕）が、覆土中から出土している。

所見 時期は第 5 号墳に先行すると考えられ、6 世紀代に推定できる。



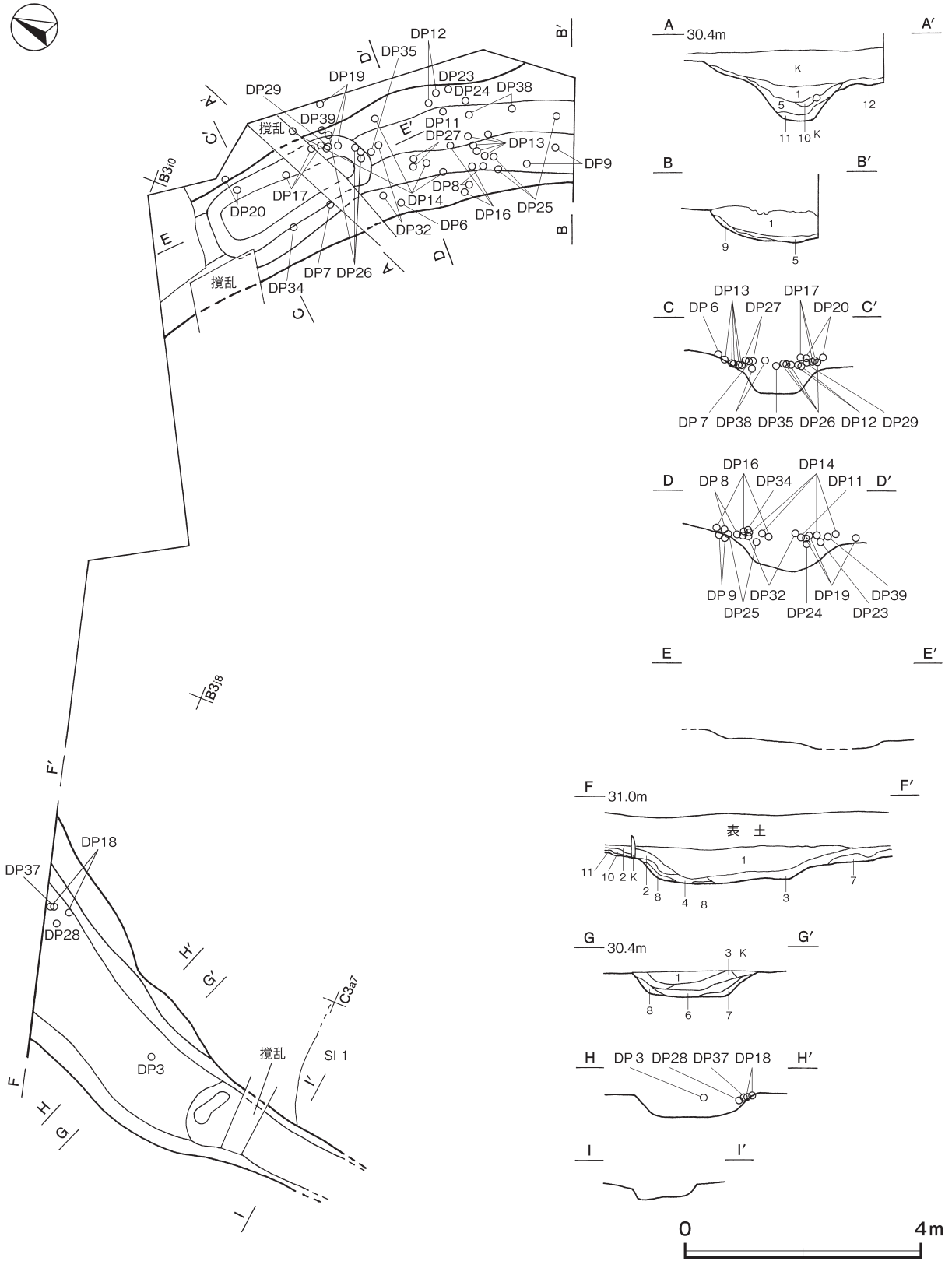
第 13 図 第 6 号墳・出土遺物実測図

第 6 号墳出土遺物観察表（第 13 図）

番号	器種	径	器高	底径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 2	円筒埴輪	-	(14.4)	-	(298.7)	長石・石英・ 白色粒子・細礫	明赤褐	外面縦ハケ 凸帯は断面台形 内面指ナデ 輪積 透孔あり	土橋上	PL 8

第7号墳 (第14～18図)

位置 B 3 i 6 ~ C 4 a 1 区, 標高約 30 m の台地縁部に位置している。



第14図 第7号墳実測図

確認状況 周溝の一部を確認した。北部の一部と南部の大半が調査区域外に延びているため、確認・調査した周溝は、西側と東側に分かれている。西側の部分は、長さ約8m、東側の部分は長さ約7mである。

重複関係 第1号竪穴建物跡、第2・15号土坑を掘り込んでいる。第4号土坑とも重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 墳丘は削平されており、埋葬施設も不明である。調査した周溝の形状から、円墳と推定される。規模は、内径約16m、外径約20mと推定される。

周溝 断面形は、逆台形状を呈し、底面は平坦である。確認面で上幅1.02～2.50m、下幅0.53～1.54m、深さ13～68cmである。西側部分は、南西に向かって幅・深さともに減少している。東側部分の北寄りの底面には、長さ2.95m、幅1.12m、深さ約10cmの1段深く掘り込まれた部分がある。

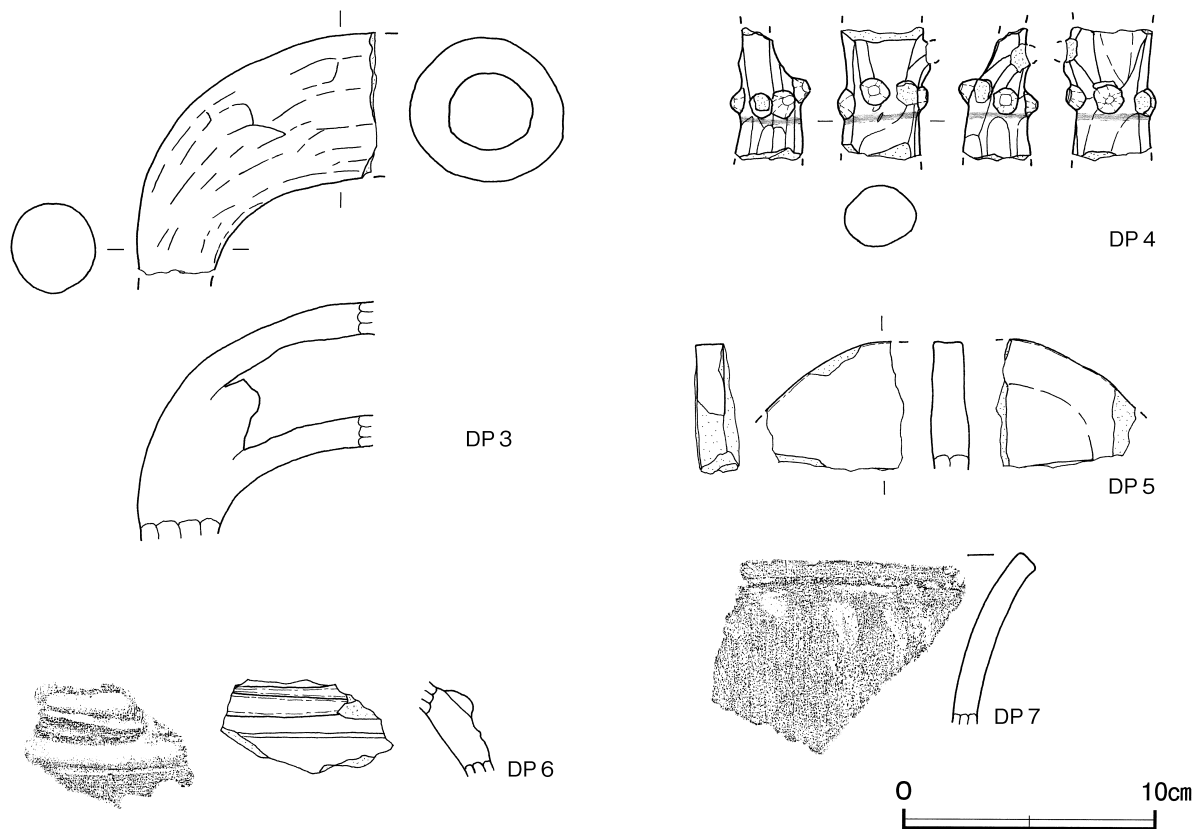
覆土 12層に分層できる。周囲から土砂が流れ込んだ堆積状況であることから、自然堆積である。

土層解説

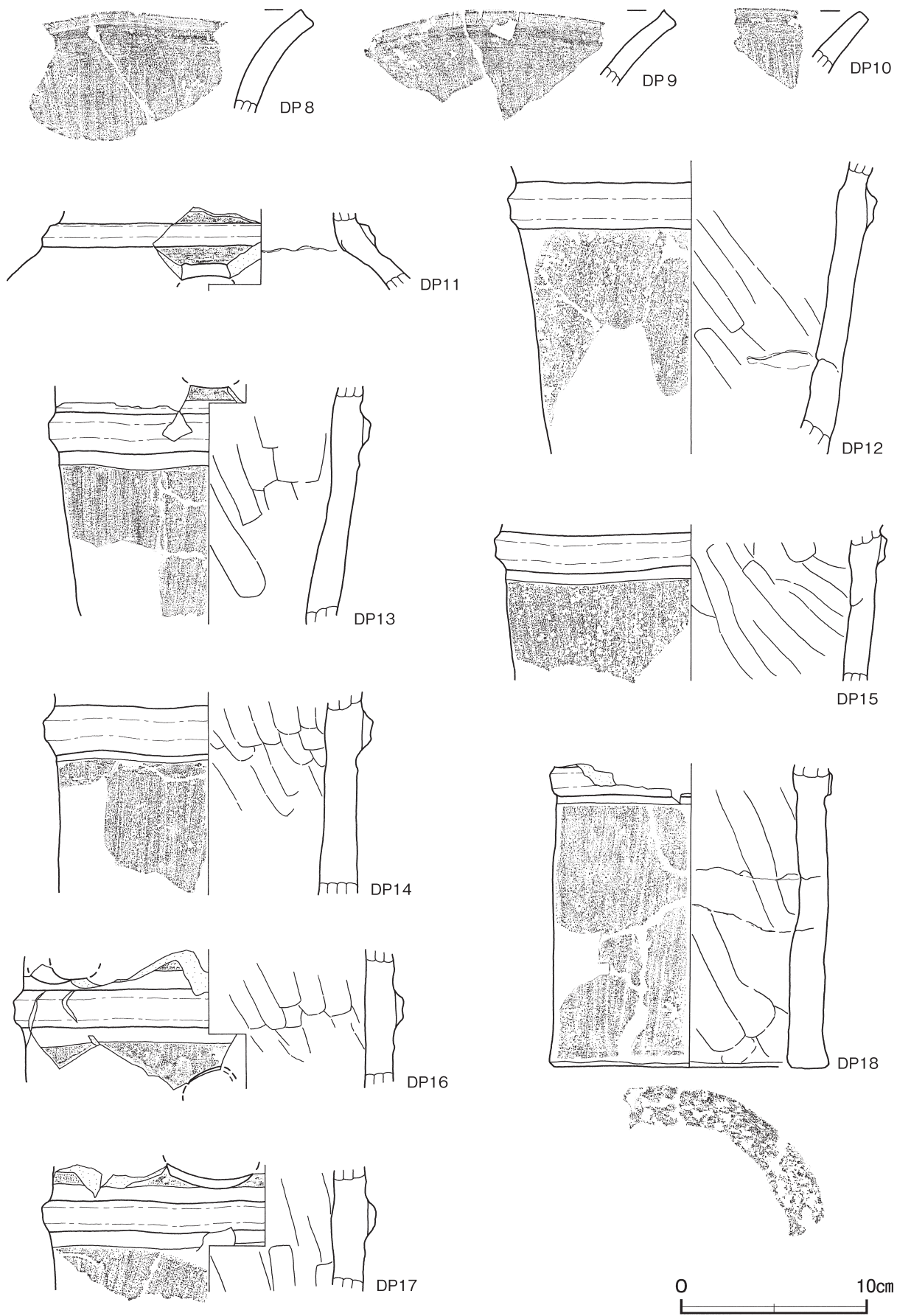
1 黒色	ローム粒子・焼土粒子微量	7 極暗褐色	ローム粒子中量
2 黒色	ローム粒子微量	8 黒褐色	ローム粒子中量
3 黒色	焼土粒子少量、ローム粒子微量	9 暗褐色	ローム粒子中量
4 極暗褐色	ロームブロック微量	10 黒褐色	ロームブロック少量
5 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	11 褐色	ロームブロック多量、炭化粒子中量
6 黒褐色	ローム粒子少量	12 黒色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 人物埴輪片2点、形象埴輪片2点、円筒埴輪片1,549点のほか、縄文土器片172点（深鉢）、弥生土器片181点（広口壺）が、東側部分の覆土を中心に出土している。

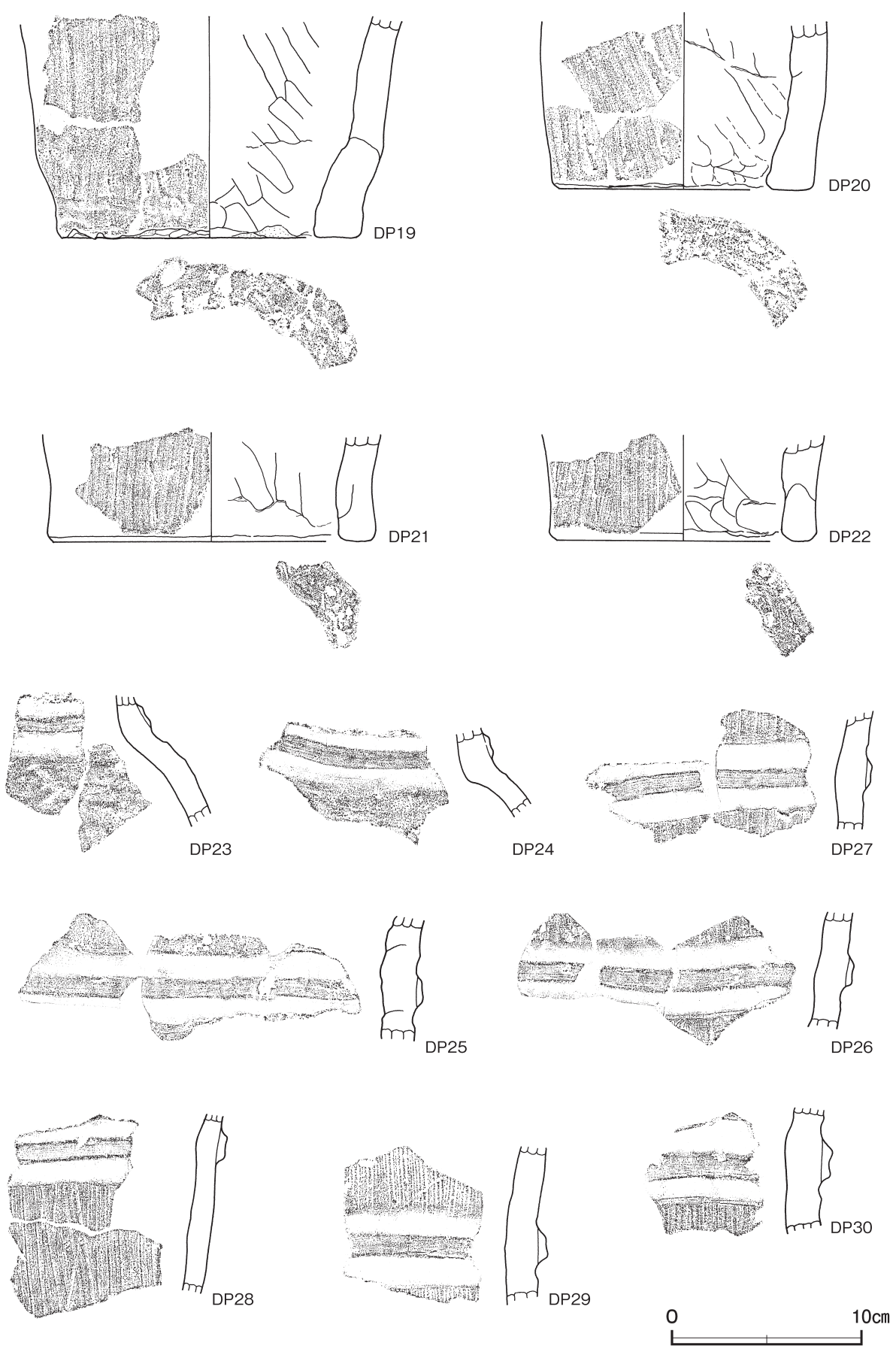
所見 時期は、出土した埴輪から6世紀中葉に比定される。



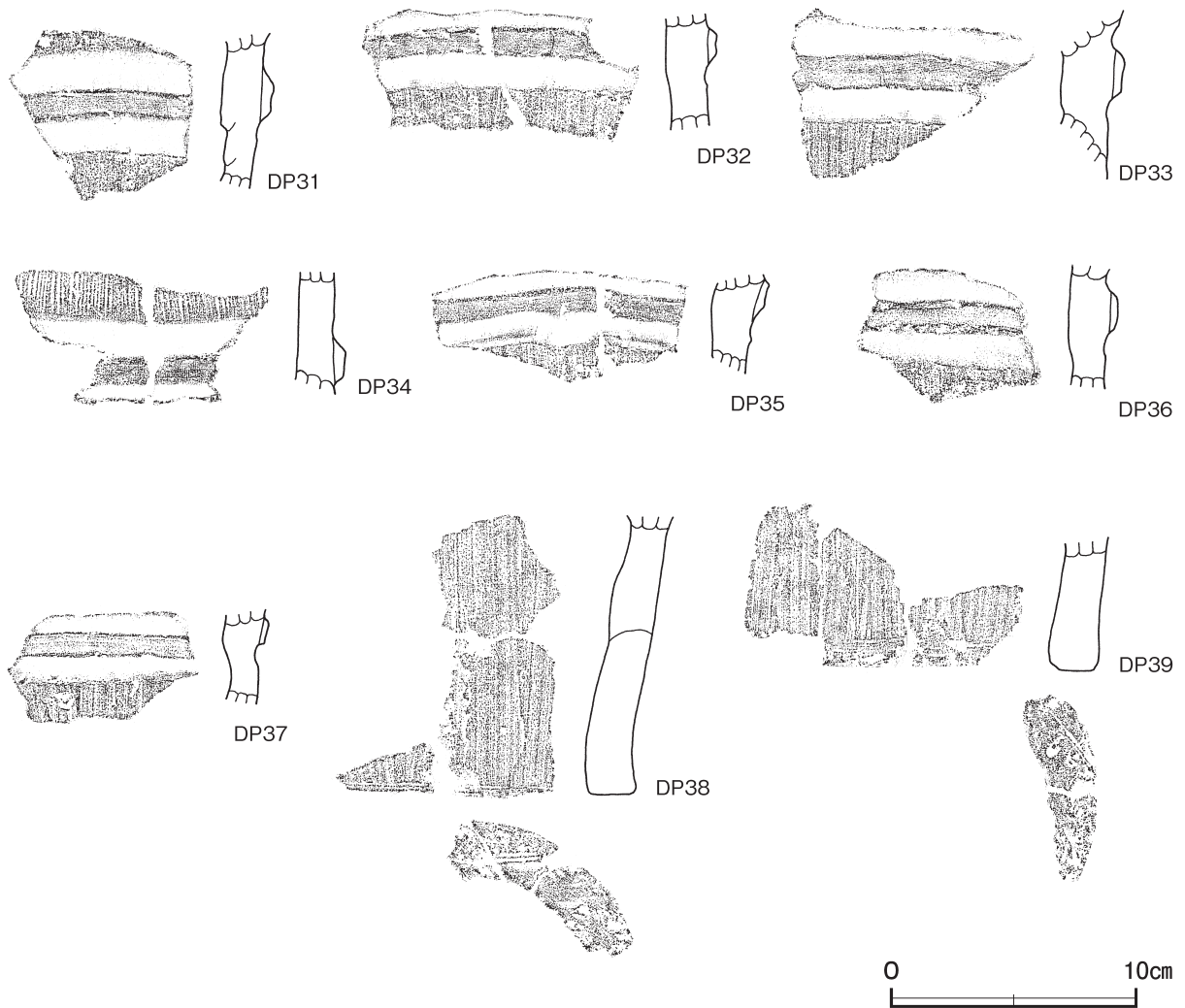
第15図 第7号墳出土遺物実測図(1)



第 16 图 第 7 号墳出土遺物実測図 (2)



第 17 図 第 7 号墳出土遺物実測図 (3)



第 18 図 第 7 号墳出土遺物実測図 (4)

第 7 号墳出土遺物観察表 (第 15 ~ 18 図)

番号	器種	径	器高	底径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 3	人物埴輪	(9.5)	3.4 ~ 5.8	-	(342.8)	長石・石英・赤色粒子・細礫	明赤褐	右腕 中空技法 表面丁寧なナデ 内面ナデ 手首は別に作って挿入	西覆土上層	PL 7
DP 4	人物埴輪	(5.3)	3.1	2.7	(45.2)	長石・石英	明赤褐	左手 全面丁寧なナデ後腕飾り貼り付け	表土	PL 7
DP 5	形象埴輪	(5.1)	(5.6)	1.6	(47.8)	長石・石英	明赤褐	両面丁寧な指ナデ 頂部ヘラナデ 鞍	表土	PL 7
DP 6	形象埴輪	(3.7)	-	-	(42.0)	長石・石英・赤色粒子	橙	馬形埴輪の尻繫	東覆土上層	PL 7
DP 7	円筒埴輪	-	(6.4)	-	(84.1)	長石・石英・雲母	にぶい橙	外面縦ハケ位ヘラナデ 内面指ナデ 口縁部内面・口唇部横	東覆土上層	PL 8
DP 8	円筒埴輪	-	(5.6)	-	(103.5)	長石・石英・細礫	明赤褐	外面縦ハケ位ヘラナデ 内面指ナデ 口縁部内面・口唇部横	東覆土上層	PL 8
DP 9	円筒埴輪	-	(4.1)	-	(62.8)	長石・石英・細礫	明赤褐	外面縦ハケ部横位ヘラナデ 内面指ナデ 口縁部外・内面・口唇	東覆土上層	PL 8
DP10	円筒埴輪	-	(3.3)	-	(16.8)	長石・石英	にぶい赤褐	外面縦ハケ後口縁外・内面と口唇部に横位ヘラナデ	西覆土中	
DP11	朝顔形円筒埴輪	-	(4.5)	-	(149.5)	長石・石英	にぶい橙	内面横位ナデ 外面凸帯貼付け後上下に強いナデ透孔あり 輪積み痕	東覆土上層	PL 8
DP12	円筒埴輪	-	(15.9)	-	(479.0)	長石・石英・赤色粒子	橙	外面縦ハケみ痕 凸帯は断面台形 内面指ナデ 輪積	東覆土上層	PL 7
DP13	円筒埴輪	-	(12.8)	-	(581.1)	長石・石英	明赤褐	外面縦ハケあり 凸帯は断面台形 内面指ナデ 透孔	東覆土上層	PL 7
DP14	円筒埴輪	-	(11.0)	-	(339.7)	長石・石英	明赤褐	外面縦ハケ 凸帯は断面台形 内面指ナデ	東覆土上層	PL 8
DP15	円筒埴輪	-	(8.4)	-	(235.0)	長石・石英・赤色粒子	橙	外面縦ハケみ痕 凸帯は断面台形 内面指ナデ 輪積	表土	
DP16	円筒埴輪	-	(7.6)	-	(263.1)	長石・石英・細礫	橙	外面縦ハケ2か所あり 凸帯は断面台形 内面指ナデ 透孔	東覆土上層	PL 8
DP17	円筒埴輪	-	(6.8)	-	(266.2)	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	外面縦ハケあり 凸帯は断面台形 内面指ナデ 透孔	東覆土上層	PL 8

番号	器種	径	器高	底径	重量	胎土	色調	特徴			出土位置	備考	
DP18	円筒埴輪	-	(16.4)	[14.6]	(636.0)	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	外面縦ハケ	凸帯は断面台形	内面指ナデ	輪積み痕	西覆土上層	PL 7
DP19	円筒埴輪	-	(11.6)	[15.5]	(314.6)	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	外面縦ハケ	内面指ナデ	輪積み痕		東覆土上層	PL 7
DP20	円筒埴輪	-	(9.0)	[13.6]	(228.8)	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	外面縦ハケ	内面指ナデ	輪積み痕		東覆土上層	PL 7
DP21	円筒埴輪	-	(5.8)	[16.6]	(105.3)	長石・石英	にぶい赤褐	外面縦ハケ	内面指ナデ	輪積み痕をナデで消す		表土	
DP22	円筒埴輪	-	(5.6)	[13.2]	(81.4)	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	外面縦ハケ	内面指ナデ	輪積み痕		表土	
DP23	朝顔形円筒埴輪	-	(6.8)	-	(79.6)	長石・石英	にぶい橙	内面横位ナデ	外面凸帯貼付け後上下に強いナデ			東覆土上層	PL 8
DP24	朝顔形円筒埴輪	-	(4.8)	-	(89.8)	長石・石英	橙	内面横位の指ナデ	外面凸帯貼付け後上下に強いナデ	透孔あり		東覆土上層	PL 8
DP25	円筒埴輪	-	(6.5)	-	(201.7)	長石・石英・赤色粒子	橙	外面縦ハケ	凸帯は断面台形	内面指ナデ	輪積み痕	東覆土上層	
DP26	円筒埴輪	-	(6.2)	-	(142.4)	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	外面縦ハケ	凸帯は断面台形	内面指ナデ	透孔あり	東覆土上層	
DP27	円筒埴輪	-	(6.3)	-	(128.6)	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	外面縦ハケ	凸帯は断面台形	内面指ナデ		東覆土上層	
DP28	円筒埴輪	-	(9.5)	-	(110.2)	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	外面縦ハケ	凸帯は断面台形	内面指ナデ		西覆土上層	
DP29	円筒埴輪	-	(8.3)	-	(120.8)	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	外面縦ハケ	凸帯は断面台形	内面指ナデ		東覆土上層	
DP30	円筒埴輪	-	(6.7)	-	(110.4)	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	外面縦ハケ	凸帯は断面台形	内面指ナデ		東覆土中	
DP31	円筒埴輪	-	(6.6)	-	(91.2)	長石・石英・赤色粒子	橙	外面縦ハケ	凸帯は断面台形	内面指ナデ	輪積み痕	表土	
DP32	円筒埴輪	-	(4.9)	-	(133.7)	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	外面縦ハケ	凸帯は断面台形	内面指ナデ		東覆土上層	
DP33	円筒埴輪	-	(6.8)	-	(120.8)	長石・石英	橙	外面縦ハケ	凸帯は断面台形	内面指ナデ		表土	
DP34	円筒埴輪	-	(4.9)	-	(99.7)	長石・石英・赤色粒子	浅黄橙	外面縦ハケ	凸帯は断面台形	内面指ナデ		東覆土上層	
DP35	円筒埴輪	-	(4.0)	-	(86.3)	長石・石英・赤色粒子	橙	外面縦ハケ	凸帯は断面台形	内面指ナデ		東覆土上層	
DP36	円筒埴輪	-	(5.2)	-	(71.8)	長石・石英・雲母	にぶい橙	外面縦ハケ	凸帯は断面台形	内面指ナデ		西覆土中	
DP37	円筒埴輪	-	(3.8)	-	(63.3)	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	外面縦ハケ	凸帯は断面台形で頂部が凹む	内面指ナデ		西覆土上層	
DP38	円筒埴輪	-	(11.5)	-	(167.6)	長石・石英	明赤褐	外面縦ハケ	内面指ナデ	輪積み痕		東覆土上層	PL 7
DP39	円筒埴輪	-	(5.5)	-	(138.2)	長石・石英	にぶい赤褐	外面縦ハケ	内面指ナデ			東覆土上層	PL 7

表3 古墳一覧表

番号	位置	墳形	墳丘 主軸方向	墳丘		周溝					埋葬施設	主な出土遺物	備考
				全長(径) (m)	高さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)	壁面	底面			
5	B 2h8 ~ C 3b5	円墳	-	内径 [20] 外径 [26]	-	2.25 ~ 3.30	1.50 ~ 2.54	30 ~ 85	緩斜	皿状	-	土師器、埴輪片	本跡→SK11、第1号半地下式土坑
6	B 2g7 ~ B 2j8	円墳	-	(8.9)	-	[2.10 ~ 5.84]	0.50 ~ 1.34	17 ~ 73	緩斜	凹凸	-	埴輪片	
7	B 3i6 ~ C 4a1	円墳	-	内径 [16] 外径 [20]	-	1.02 ~ 2.50	0.53 ~ 1.54	13 ~ 68	緩斜	平坦	-	埴輪片	SI 1、SK 2・15→本跡 SK 4と重複

4 江戸時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、土坑1基、半地下式土坑2基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 土坑

第11号土坑 (第19図)

位置 調査区南西部のC 3b1区、標高約30mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第5号墳を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.43m、短径0.36mの楕円形である。底面はロームで、皿状である。壁は、柱穴状に直立しており、深さは60cmである。

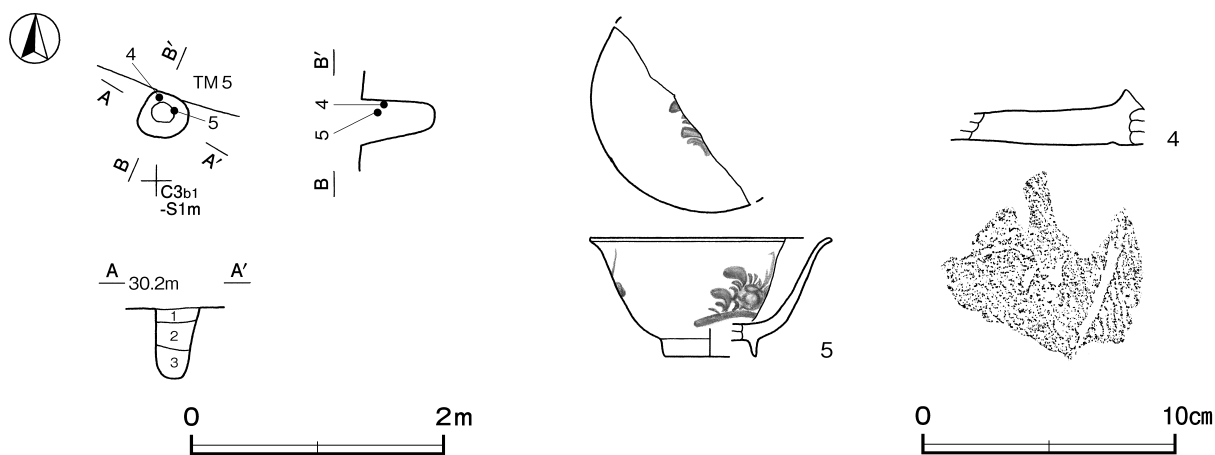
覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれており、人為堆積である。

土層解説

- 1 黒色 ロームブロック・粘土ブロック中量 3 にぶい黄褐色 ロームブロック多量
2 暗褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 土師質土器片1点（鉢）、陶器片1点（碗）、磁器片1点（碗）、椽瓦1点が、覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から19世紀前半頃と考えられる。



第19図 第11号土坑・出土遺物実測図

第11号土坑出土遺物観察表（第19図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
4	土師質土器	鉢	-	(1.2)	[7.6]	長石・石英・白色粒子	褐	普通	内面ロクロナデ	覆土中層	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
5	磁器	碗	[9.4]	4.7	[3.6]	精緻・灰白	端反り碗に草花文 染付 体部外面と見込み外・内面施釉 豊付露胎	透明釉	肥前系	覆土中層	40%

(2) 半地下式土坑

第1号半地下式土坑（第20～23図）

位置 調査区西端のB 2j9区、標高約30mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第5号墳の周溝を掘り込んでいる。

軸長・軸方向 軸長は2.26mで、軸方向はN-32°-Wである。

出入口部 南東側壁のロームを削りこんで階段状の出入口を設けている。全3段まで確認できた。西部が調査区域外に延びているため、横幅0.64mまでしか確認できなかった。階段全体の長さは0.69mである。段の高さは1段が10～29cmで、奥行きは24～36cmである。

室部 西部が調査区域外へ延びているため、横幅は1.56mしか確認できなかったが、奥行きは1.32mで、長方形と推定される。長軸方向はN-59°-Eである。確認面から66cmの深さまで垂直に掘り込まれている。南西壁は調査区域外にあるが、奥壁西端部がわずかに屈曲しており、南西壁がすぐ奥に在るものと推定される。床は平坦である。

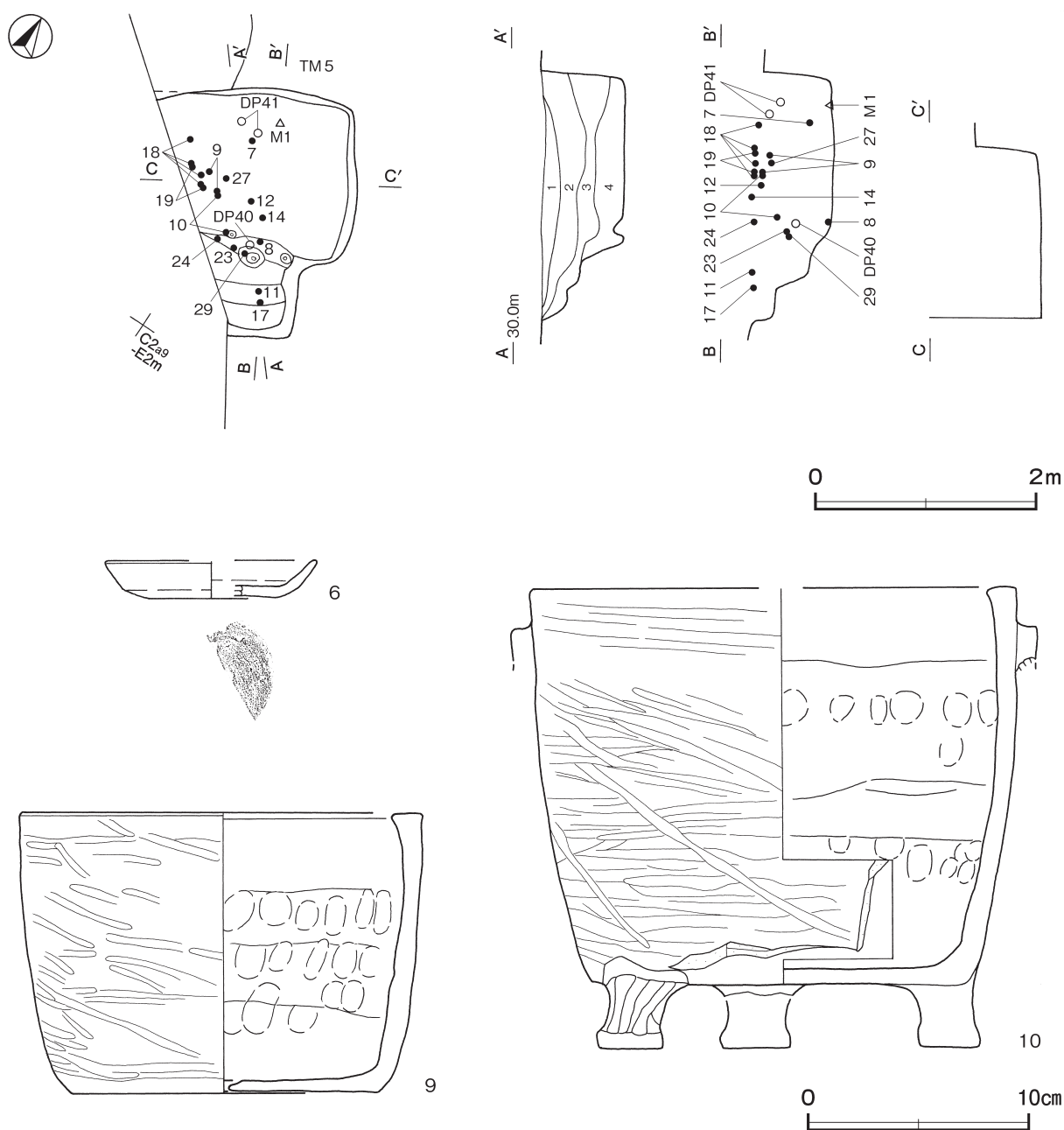
覆土 4層に分層できる。最下層は自然堆積であるが、それより上位はロームブロックが含まれ、陶磁器片などが多量に投棄されており、人為堆積である。

土層解説

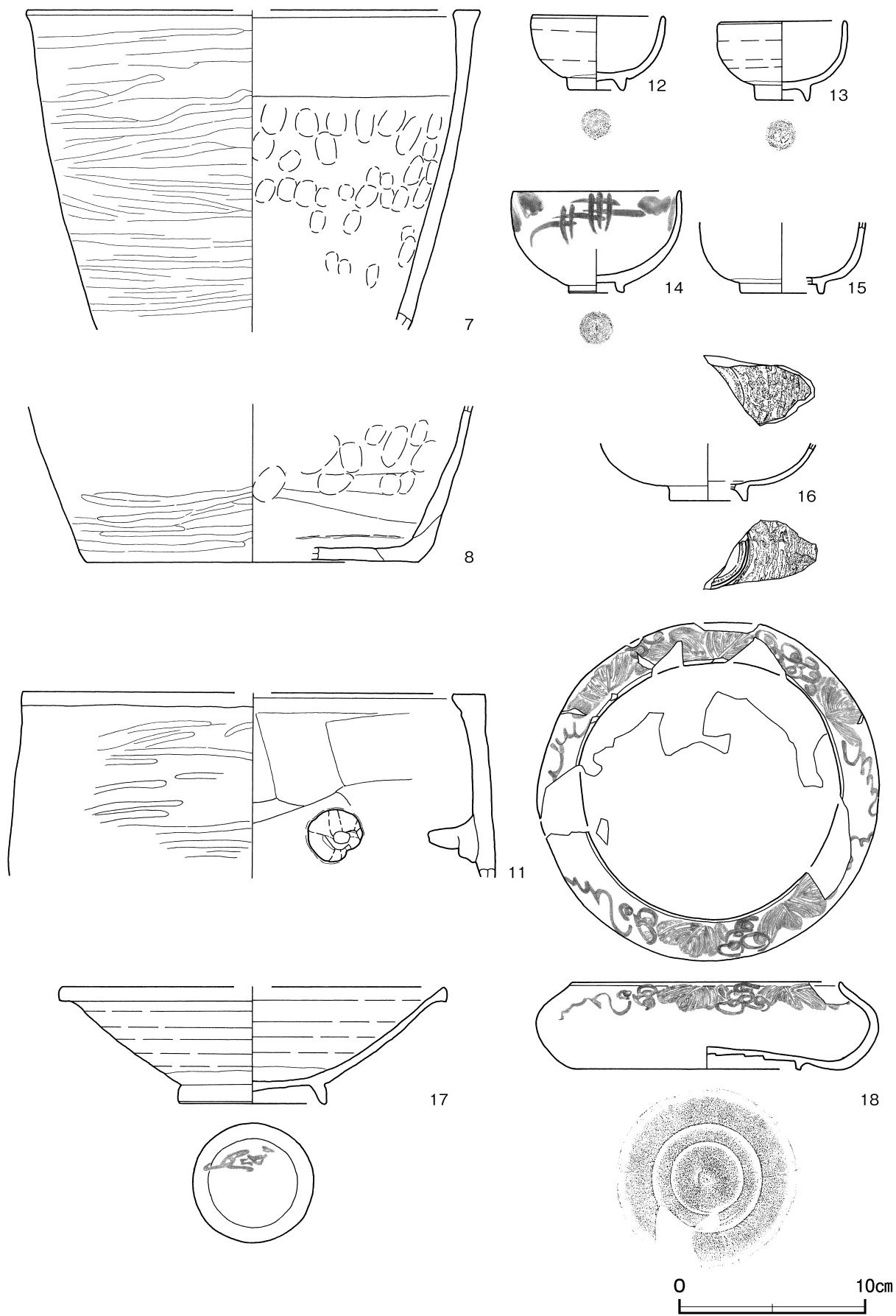
- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・炭化材少量, 焼土粒子微量 | 3 黒褐色 粘土ブロック中量, ロームブロック・炭化物少量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量, 焼土粒子微量 | 4 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量 |

遺物出土状況 土師質土器片 1点 (皿), 瓦質土器片 27点 (鉢 24, 火鉢 1, 七厘 2), 陶器片 28点 (碗 19, 皿 1, 花生け 2, 甕 6), 磁器片 17点 (碗 15, 皿 2), 土製品 3点 (土人形 1, 置竈 2), 金属製品 64点 (銭貨 1, 不明 63), のほか, 縄文土器片 8点 (深鉢), 土師器片 4点 (坏 3・甕 1), 須恵器片 1点 (甕), 埴輪片 1点が, 覆土中から出土している。

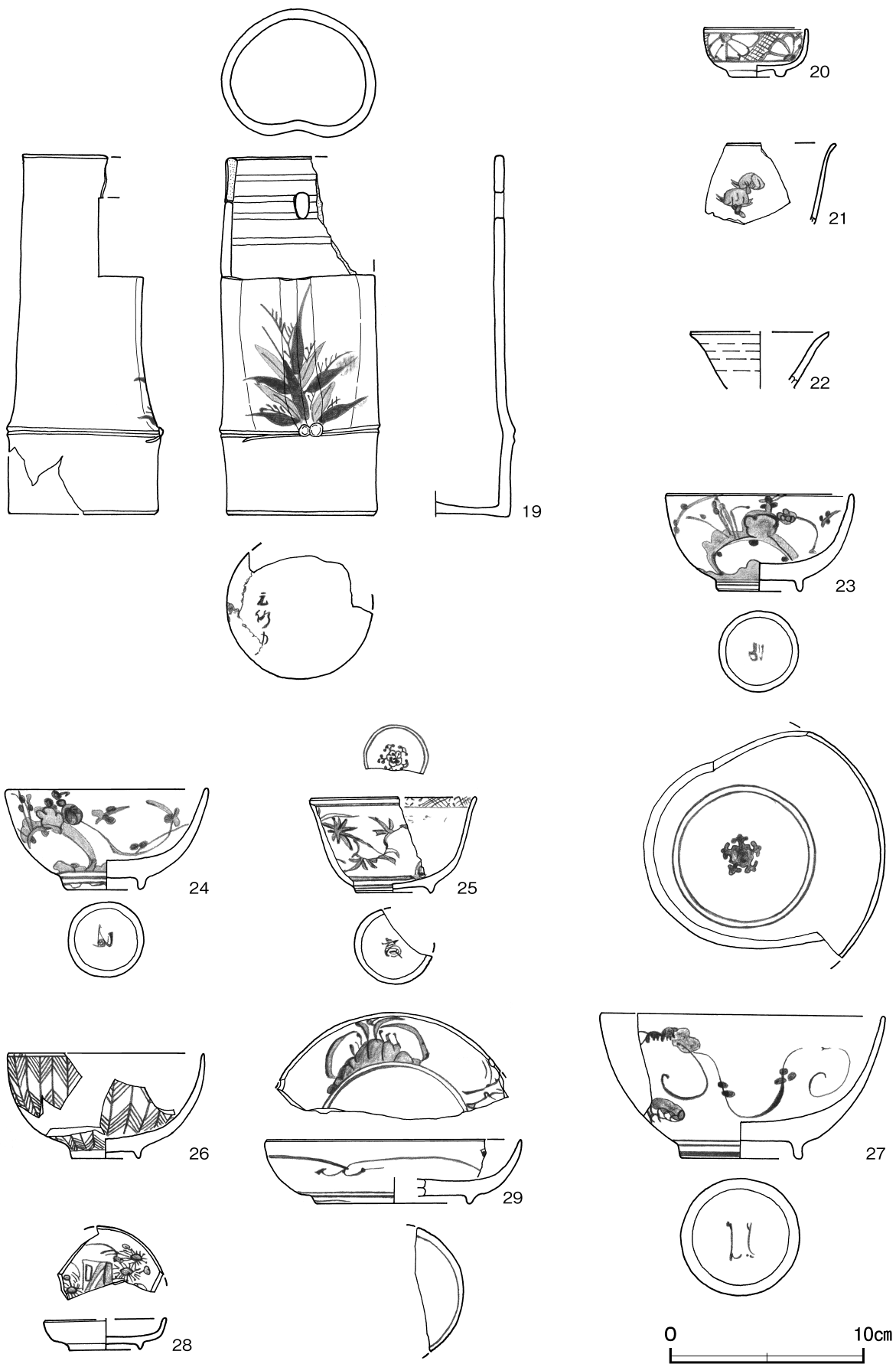
所見 時期は出土遺物から, 19世紀前半と考えられる。室部を横穴状に掘って天井を設けるには垂直方向の掘り込みが浅く, 天井とする部分が脆弱であるので, 天井は設けられなかったと推定される。倉庫としての機能が終わった後は, 廃棄場とされたことがうかがえる。



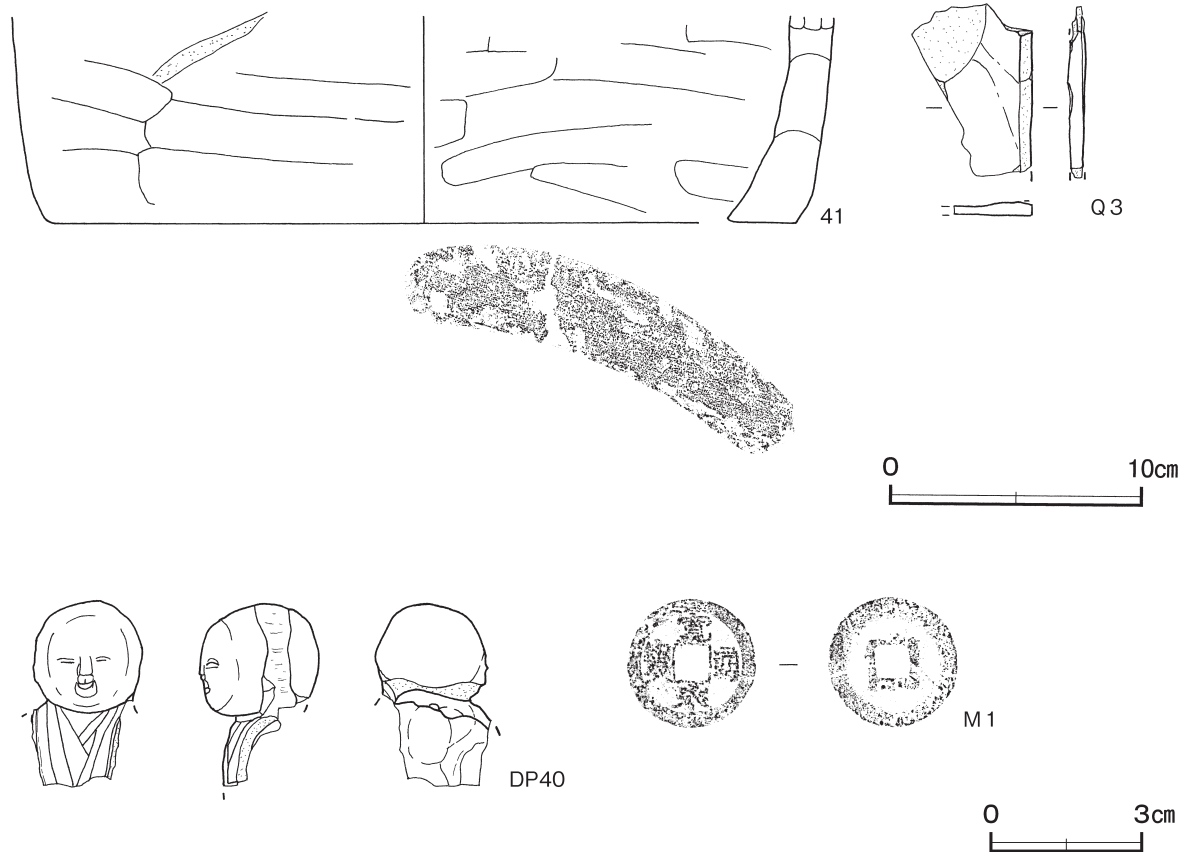
第 20 図 第 1 号半地下式土坑・出土遺物実測図



第 21 图 第 1 号半地下式土坑出土遺物実測図(1)



第 22 图 第 1 号半地下式土坑出土遺物実測图 (2)



第 23 図 第 1 号半地下式土坑出土遺物実測図 (3)

第 1 号半地下式土坑出土遺物観察表 (第 20 ~ 23 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
6	土師質土器	小皿	[9.3]	1.7	[5.6]	長石・石英・雲母	橙	普通	外・内面口クロナデ 底部回転糸切り後一部ナデ	覆土中	20% PL 4
7	瓦質土器	鉢	[24.4]	(17.3)	-	長石・石英・細礫	オリーブ黒	普通	体部内面横ナデ 上端横位ヘラナデ 体部外面横位ヘラ磨き 口唇部丁寧なヘラ磨き	覆土下層	二次焼成 20%
8	瓦質土器	鉢	-	(8.5)	17.9	長石・石英・細礫	褐灰	普通	輪積み成形 内面ナデ 外面横位ヘラ磨き	床面	30%
9	瓦質土器	火鉢	18.1	12.8	14.2	長石・石英・細礫	オリーブ黒	普通	口縁部外・内面口クロナデ 体部内面指頭圧痕 体部外面横位のヘラ磨き 底部穿孔	覆土上層	植木鉢に転用 70% PL 4
10	瓦質土器	七厘	[22.0]	21.0	17.2	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	体部内面横位ヘラナデ 下端指ナデ 外面横位ヘラ磨き 把手・脚部接合後ナデ調整	覆土上層	二次焼成 60% PL 4
11	瓦質土器	七厘	[25.0]	(10.0)	-	長石 石英	にぶい黄褐	普通	体部内面横位ヘラナデ 体部外面横位ヘラ磨き 口唇部丁寧なヘラ磨き 内側突起接合後ナデ調整	覆土上層	10% PL 4

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
12	陶器	小碗	7.0	4.1	3.0	精緻・浅黄	外・内面施釉胎 体部下端・高台内露	緑釉	瀬戸美濃系	覆土上層	100% PL 5
13	陶器	小碗	6.7	4.3	2.8	精緻・灰白	外・内面施釉胎 体部下端・高台内露	緑釉	瀬戸美濃系	覆土中	80%
14	陶器	碗	[9.0]	5.5	3.0	精緻・灰黄褐	外・内面施釉胎 体部下端・高台内露	透明釉	瀬戸美濃系	覆土上層	50% PL 5
15	陶器	碗	-	(3.8)	[4.4]	精緻・灰白	外・内面施釉胎 体部下端・高台内露	灰釉	京焼系	覆土中	10%
16	陶器	碗	-	(3.1)	[4.1]	精緻・褐灰	外・内面施釉胎 鉄釉施後灰釉刷毛がけ	鉄釉・灰釉	唐津系	覆土中	二次焼成 20%
17	陶器	皿 (輪禿皿)	[20.6]	6.3	7.6	精緻・灰白	体部下端・高台内露胎 見込みに蛇の目状の露胎部 高台内墨書	灰釉	瀬戸美濃系	覆土上層	30% PL 5
18	陶器	花生け (水盥)	14.4	4.7	10.0	精緻・にぶい黄橙	体部下端・高台内露胎 鉄釉と呉須で葡萄図 蛇の目凹形高台	透明釉	唐津系	覆土上層	70% PL 5
19	陶器	花生け (掛花瓶)	[7.6]	18.8	7.6	精緻・にぶい黄橙	竹を摸し節上に鉄釉と呉須で草花文 上部に透かし 底部墨書 漆継ぎの痕跡	透明釉	瀬戸美濃系	覆土上層	70% PL 5
20	磁器	小碗	5.1	2.6	2.7	精緻・灰白	染付 菊花文 畳付・内面一部露胎	透明釉	肥前系	覆土中	50% PL 5
21	磁器	小碗	-	(4.2)	-	精緻・灰白	染付 松枝文 内面金属質付着物	透明釉	肥前系	覆土中	二次焼成 10%
22	磁器	小碗	[7.2]	(2.9)	-	精緻・灰白	端反りの小碗 外・内面施釉 無地	透明釉	肥前系	覆土中	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
23	磁器	碗	9.6	5.1	4.2	精緻・灰白	染付に銘 草花文 くらわんか手 底部	透明釉	肥前系	覆土中層	100% PL 5
24	磁器	碗	10.2	5.3	3.9	精緻・灰白	染付に銘 草花文 くらわんか手 底部	透明釉	肥前系	覆土上層	80%
25	磁器	碗	[8.4]	5.0	3.9	精緻・灰白	端反りの碗 染付 草花文 口縁内側に 帯状染付 見込みに五弁花文 底部に銘	透明釉	肥前系	覆土中	30% PL 5
26	磁器	碗	[10.2]	5.5	3.6	精緻・灰白	染付 矢羽根文	透明釉	肥前系	覆土中	30%
27	磁器	大碗	[14.6]	7.5	6.3	精緻・灰白	染付 草木文 見込みにコンニャク 印判の五弁花文 底部に銘	透明釉	肥前系	覆土上層	60% PL 5
28	磁器	小皿	[6.4]	1.6	3.6	精緻・灰白	染付 見込みに草花文	透明釉	肥前系	覆土中	40%
29	磁器	皿	[13.1]	3.3	[8.0]	精緻・灰白	染付 外面唐草内面草木文	透明釉	肥前系	覆土中層	40%

番号	器種	径	長さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP40	土人形	-	(3.7)	-	(10.4)	長石・雲母	にぶい橙	型作り 前・後貼り合せ 体内中空	覆土中層	PL 8
DP41	置竈	-	(8.2)	[29.5]	(477.2)	長石・石英・細礫	橙	輪積み成形 外・内面ヘラナデ	覆土上層	二次焼成

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 3	硯	(6.9)	(4.8)	(0.7)	(20.2)	粘板岩	海の部分の摩滅が顕著	覆土中	

番号	銭種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M 1	寛永通寶	2.58	0.65	0.12	2.40	銅	1636	古寛永 無背銭	床面	

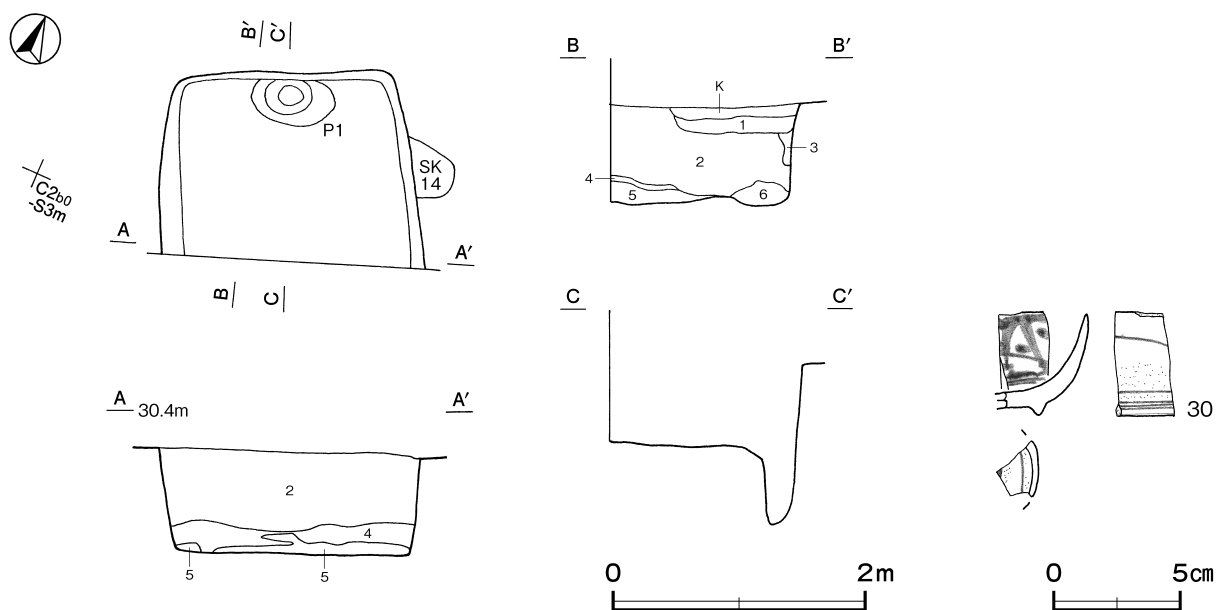
第2号半地下式土坑（第24図）

位置 調査区南西端のC 2 b0区、標高30 mほどの台地縁辺部に位置する。

重複関係 本跡の北東側で第14号土坑を掘り込んでいる。

軸長・軸方向 室部の1.50 mしか確認できなかった。軸方向は、N - 22° - Wと推定できる。

室部 南東部が調査区域外へ延びているため、確認できた奥行きは1.50 m、横幅1.99 mの長方形である。長軸方向はN - 22° - Wと推定される。確認面から72cmの深さまで垂直に掘り込まれている。床はロームで、平坦である。



第24図 第2号半地下式土坑・出土遺物実測図

ピット 北西壁際に、掘り込まれている。径約 0.40 m、深さ約 60cmである。室の上部を覆う上屋の柱穴と推定される。

覆土 6層に分層できる。不自然な堆積状況を呈していることから人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | 黒褐色土ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・黒褐色土ブロック少量 | 5 黒色 | ローム粒子少量 |
| 3 褐色 | ローム粒子多量 | 6 暗褐色 | ローム粒子多量 |

遺物出土状況 磁器片 1 点 (皿), 棧瓦 2 点のほか, 縄文土器片 14 点 (深鉢), 弥生土器片 2 点 (広口壺) が出土している。

所見 時期は, 出土土器から 18 世紀後半と考えられる。床面にピットが穿たれていることから, 上屋が設けられていたと考えられる。

第 2 号半地下式土坑出土遺物観察表 (第 24 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
30	磁器	皿	-	4.1	-	精緻・灰白	染付 草木文	透明釉	肥前系	覆土中	10%

表 4 半地下式土坑一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形		軸長 (m)	室部規模			出入り口規模			覆土	主な出土遺物	備考
			室部	出入り口		奥行 (m)	横幅 (m)	深さ (cm)	奥行 (m)	横幅 (m)	深さ (cm)			
1	B 2j9	N - 32° - W	[長方形]	[方形]	2.26	1.32	(1.56)	66	0.69	(0.64)	22~54	人為	土師質土器, 瓦質土器, 陶器, 磁器, 土製品, 金属製品	TM 5 → 本跡
2	C 2b0	N - 22° - W	[長方形]	-	(1.50)	(1.50)	1.99	72	-	-	-	人為	磁器	SK14 → 本跡

5 その他の遺構と遺物

時期や性格が明確でない土坑 8 基については, 規模・形状などを実測図及び遺物観察表, 一覧表で掲載する。

(1) 土坑 (第 25・26 図)

第 3 号土坑土層解説

- 褐色 ロームブロック少量
- 黒色 ローム粒子微量

- 黒色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 黒色 ロームブロック少量

第 4 号土坑土層解説

- 黒色 ローム粒子・炭化粒子・黄白色粒子微量
- 黒褐色 ローム粒子・黄白色粒子微量
- 黒褐色 ローム粒子少量, 黄白色粒子微量
- 暗褐色 ローム粒子中量
- 暗褐色 鹿沼バミス粒子少量, ロームブロック微量
- 暗褐色 ローム粒子少量, 黄白色粒子微量

第 9 号土坑土層解説

- 褐色 ローム粒子微量
- 暗褐色 ローム粒子少量
- 黒褐色 ローム粒子微量
- 褐色 ロームブロック少量

第 5 号土坑土層解説

- 黒色 ロームブロック・炭化粒子中量, 焼土粒子少量
- 黒褐色 ロームブロック多量, 炭化粒子少量
- 暗褐色 ロームブロック多量
- 褐色 ロームブロック多量

第 13 号土坑土層解説

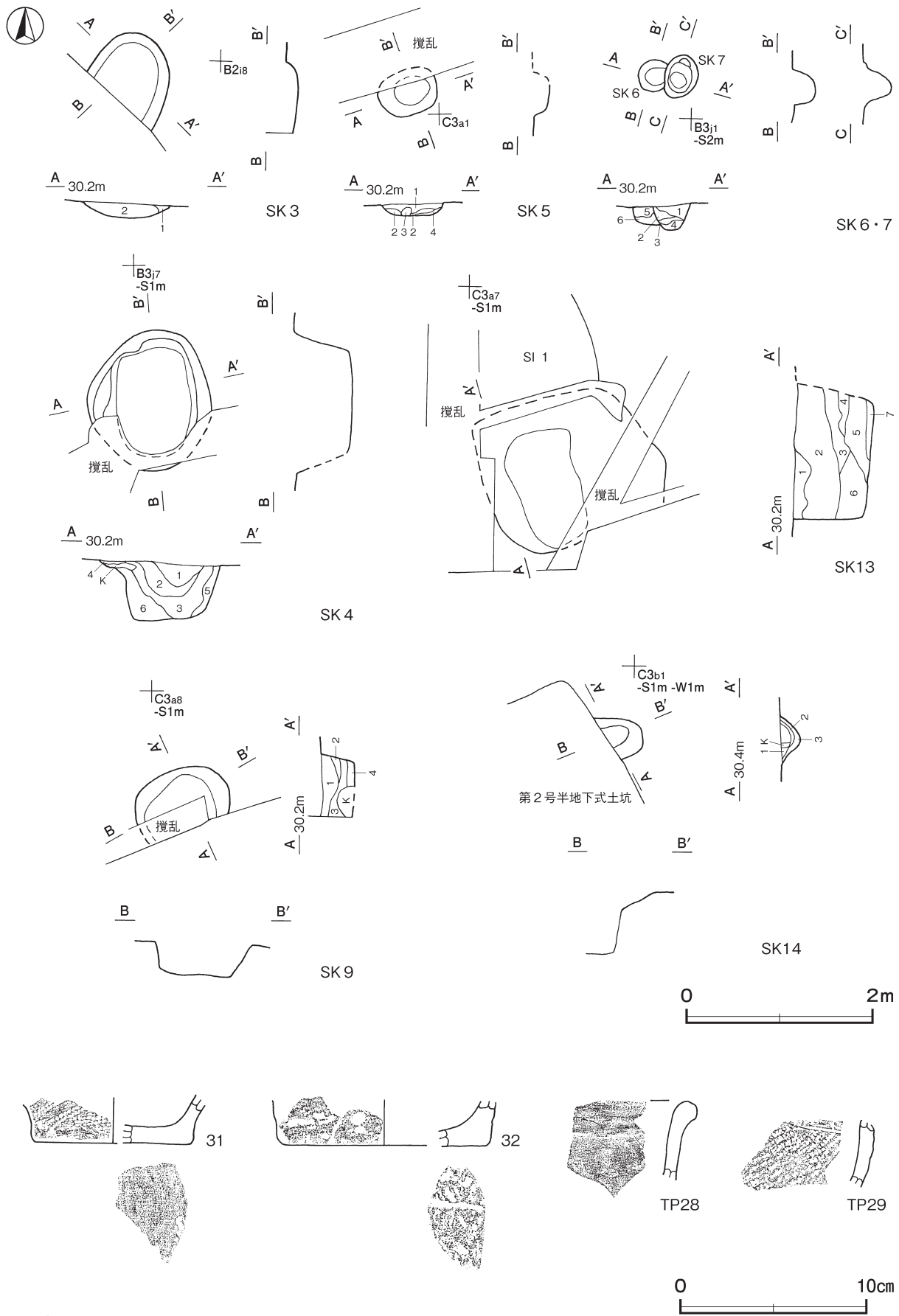
- 黒褐色 ローム粒子少量
- 極暗褐色 ロームブロック・黒色土ブロック微量
- 暗褐色 ロームブロック少量
- 黒色 ローム粒子微量
- 褐色 ロームブロック微量
- 黒褐色 ロームブロック少量, 黒色土ブロック微量
- 黒褐色 ローム粒子中量

第 6・7 号土坑土層解説

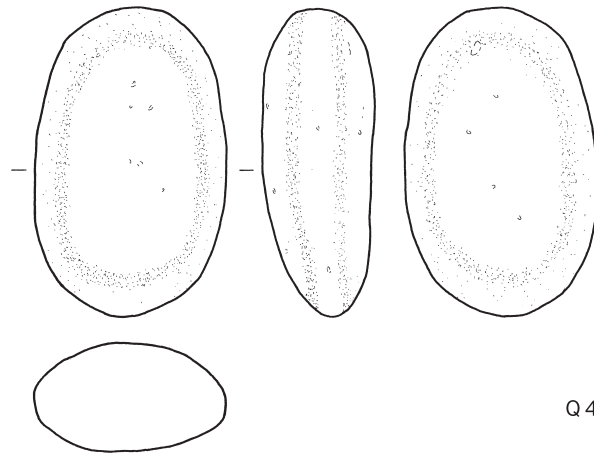
- 黒褐色 ロームブロック多量
- 黒色 ロームブロック中量
- 暗褐色 ロームブロック多量
- にぶい黄褐色 ロームブロック多量

第 14 号土坑土層解説

- 黒褐色 ローム粒子微量
- 暗褐色 ロームブロック少量
- 褐色 ロームブロック少量



第25図 その他の土坑・出土遺物実測図



Q4



第26図 その他の土坑出土遺物実測図

第4号土坑出土遺物観察表 (第25図)

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP28	縄文土器	深鉢	長石・石英	暗褐	口縁は肥厚し外反 胴部は無文	覆土中	PL 6

第13号土坑出土遺物観察表 (第25・26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
31	弥生土器	広口壺	-	(3.2)	[8.4]	長石・石英・白色粒子	にぶい黄橙	普通	胴部に附加条一種 (附加1条)の横回転 底部に布目圧痕	覆土中	5%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP29	弥生土器	広口壺	長石・石英・細礫	暗赤褐	横走る沈線と下位に単節縄文RL	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q4	磨石	12.3	7.5	4.3	648.2	安山岩	両面使用による磨減	覆土中	

第14号土坑出土遺物観察表 (第25図)

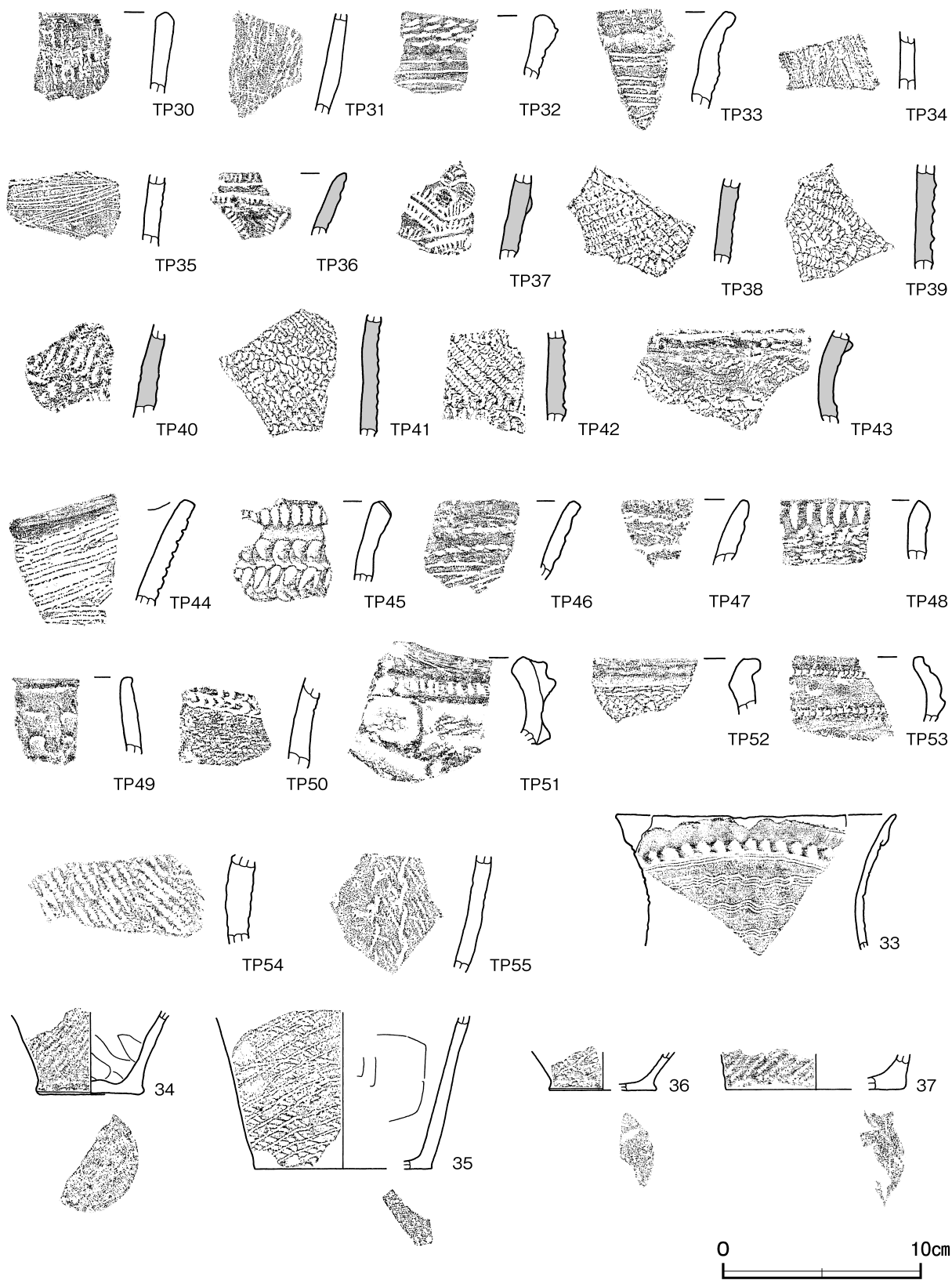
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
32	縄文土器	深鉢	-	(2.5)	[10.5]	長石・石英	明赤褐	普通	胴部下端はやや張り出す 底部に網代痕	覆土中	5%

表5 その他の土坑一覧表

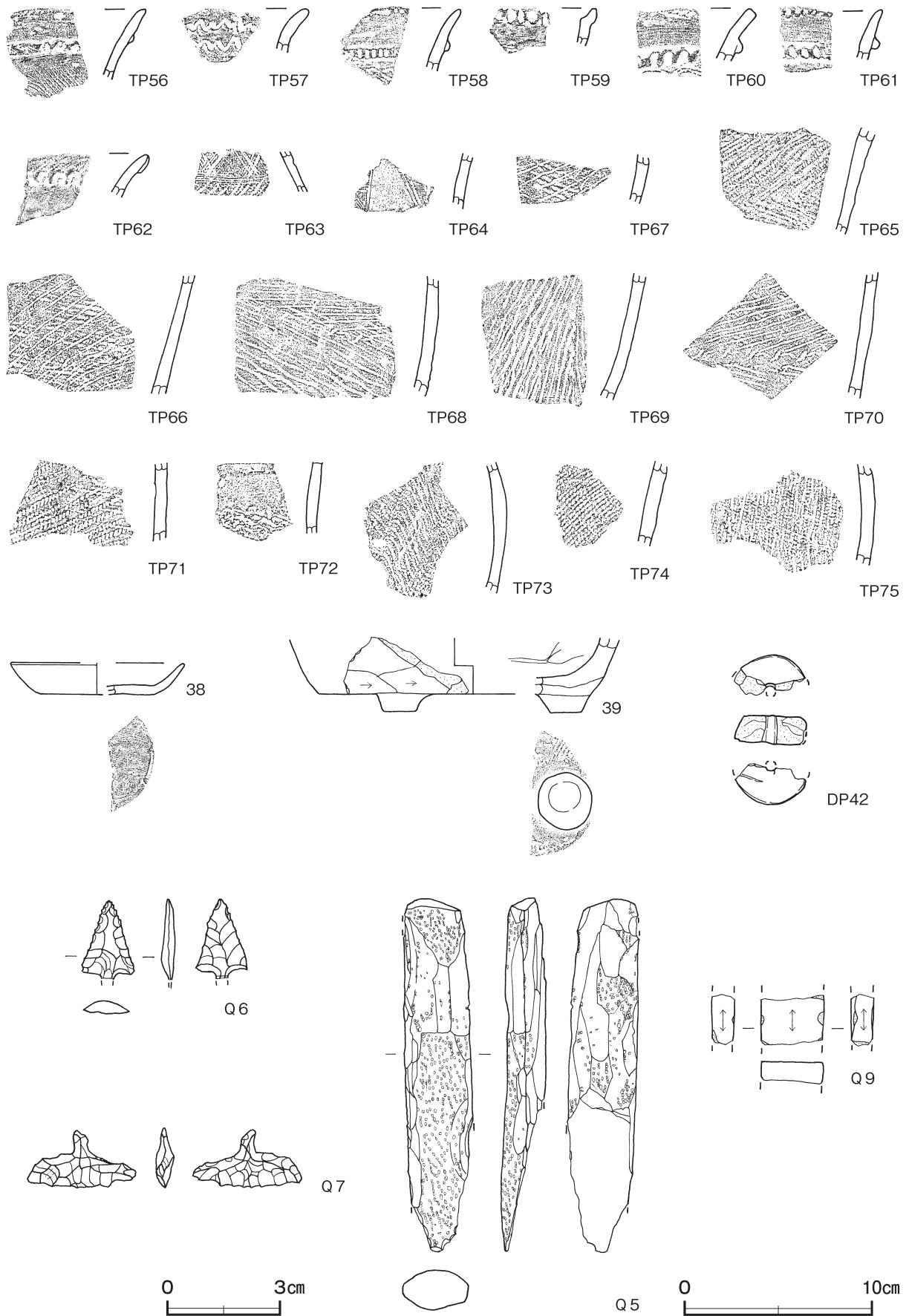
番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
3	B 2 i7	N - 34° - E	[楕円形]	0.91 × (0.74)	15	皿状	緩斜	自然		
4	B 3 j7	N - 4° - W	不整楕円形	1.52 × 1.33	62	平坦	ほぼ直立	自然	縄文土器片, 陶器片	
5	C 2 j0	N - 64° - E	[楕円形]	0.64 × (0.35)	16	平坦	外傾	人為		
6	B 2 j0	N - 15° - E	[楕円形]	0.34 × (0.28)	25	平坦	ほぼ直立	人為		本跡→SK 7
7	B 2 j0	N - 16° - E	楕円形	0.46 × 0.35	28	平坦	ほぼ直立	人為	弥生土器片	SK 6→本跡
9	C 3 a8	N - 52° - E	[楕円形]	1.10 × (0.70)	38	平坦	ほぼ直立	自然		
13	C 3 a7	-	不明	(1.88) × (1.42)	82	平坦	ほぼ直立	人為	縄文土器片, 弥生土器片, 石器	SI 1と重複
14	C 2 b0	N - 70° - E	[楕円形]	(0.50) × 0.44	20	皿状	緩斜	自然	縄文土器片	本跡→第2号半地下式土坑

(2) 遺構外出土遺物 (第 27 ~ 29 図)

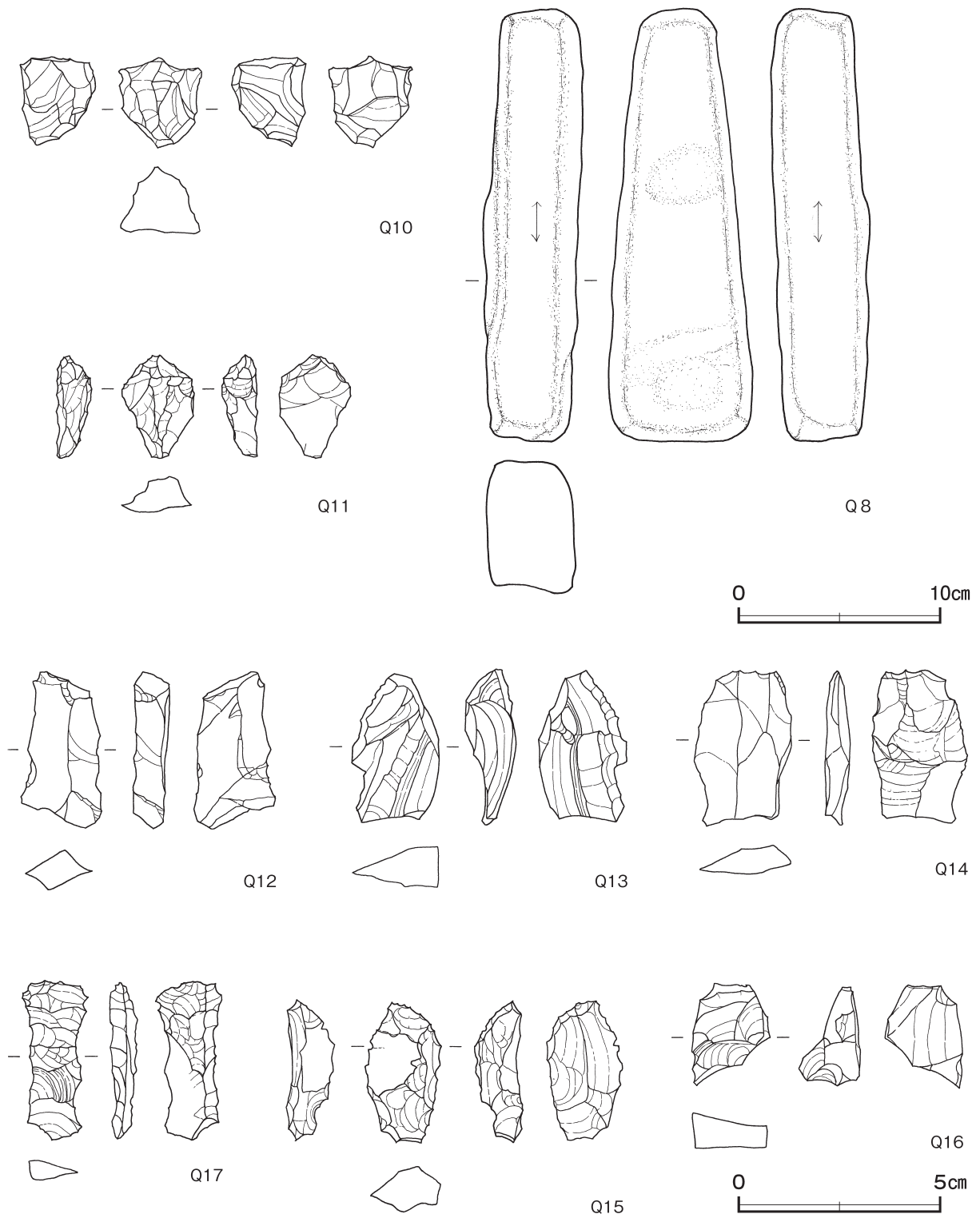
今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。



第 27 図 遺構外出土遺物実測図(1)



第 28 图 遺構外出土遺物実測図 (2)



第29図 遺構外出土遺物実測図(3)

遺構外出土遺物観察表(第27~29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
33	弥生土器	広口壺	[14.1]	(6.9)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	複合口縁下端に棒状工具による押圧痕 3本櫛歯による横位の波状櫛描文	頸部に	煤附着 5% PL 4
34	弥生土器	広口壺	-	(4.2)	[5.0]	長石・石英・細礫	明赤褐	普通	単節縄文LRを横回転 底部ナデ	内面斜位の	指ナデ

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徵ほか	出土位置	備考
35	弥生土器	広口壺	-	(7.8)	[9.0]	長石・石英	にぶい橙	普通	附加条二種(附加1条)の横回転 結束圧痕が横走一部縦位のヘラ削り 内面ヘラナデ 底部布目圧痕	TM 7	10% PL 4
36	弥生土器	広口壺	-	(2.0)	[5.2]	長石・石英	明赤褐	普通	0段の附加条二種(附加1条)の横回転 軸は無節R 内面ヘラナデ 底部に敷物圧痕	TM 5	5% PL 4
37	弥生土器	広口壺	-	(1.8)	[9.0]	長石・石英	にぶい褐	普通	外面附加条二種(附加1条)の横回転 内面ナデ	SK11	5%
38	土師質土器	小皿	[9.0]	1.7	[6.0]	長石・石英	橙	普通	外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り(左)	表土	30%
39	瓦質土器	鉢	-	(4.0)	[13.3]	長石・石英・赤色粒子	喝灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 内面ロクロナデ 高台接合後ナデ 底部に工具圧痕	表土	二次焼成5%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徵ほか	出土位置	備考
TP30	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	無節縄文Rによる粗い縦位の捻糸文	表土	
TP31	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	無節Lによる縦位の捻糸文	TM 7	
TP32	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	口唇外面に櫛状工具による連続刺突 下位は半載竹管による横走する平行沈線	TM 5	
TP33	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	口唇は丸みを有し外反 下位は半載竹管による横走する平行沈線	TM 5	PL 6
TP34	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰褐	縦位の貝殻腹縁文	TM 5	
TP35	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	細い半載竹管による横位・斜位の沈線文 上端に連続する刺突文	TM 7	PL 6
TP36	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	橙	横走する2条の沈線に低い貼瘤 連続刺突文	TM 5	
TP37	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にぶい褐	半載竹管による半円形の微隆起線と貼瘤 ヘラ状工具による連続刺突文	TM 5	PL 6
TP38	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にぶい橙	上位と下位にループ文 中位は単節縄文LRを縦横に回転させて羽状を構成	TM 5	
TP39	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	灰褐	0段多条の結束第1種の縄を方向を変えて回転させて菱形を構成	TM 5	
TP40	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にぶい褐	単節縄文LR横回転(表面が磨滅し不明瞭)	TM 5	
TP41	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にぶい褐	上位に0段多条の直前段合燃 中位にループ文 下位に前段々合燃	TM 6	
TP42	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	黒褐	0段多条の単節縄文RL 下位にループ文	TM 7	PL 6
TP43	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	褐	単節縄文RL	TM 7	
TP44	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	波状口縁 半載竹管による多方向の深い平行沈線	TM 5	PL 6
TP45	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	口唇は外削ぎ状でヘラ状工具による刻み目 下位に竹管による連続爪形文と連続刺突文	TM 5	PL 6
TP46	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐	口縁下位に半載竹管による押引文 下位に半載竹管による横位・斜位の平行沈線	TM 5	
TP47	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	口縁下位に半載竹管による横位の押引文	TM 6	
TP48	縄文土器	深鉢	長石・石英	赤褐	口唇は外削ぎ状で棒状工具による刻み目状の押圧 下位に貝殻腹縁による横位の強い条痕	TM 7	PL 6
TP49	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	口唇は平坦 輪積み痕を間隔を空けた縦位の指ナデで部分的に消す	TM 7	
TP50	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	上位に半載竹管による2段の連続爪形文 下位にはまばらに単節縄文RL	TM 7	
TP51	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	口縁部外面に貼った隆帯頂部に半載竹管による連続爪形文 下位の隆帯による区画内に単節縄文LR	TM 5	PL 6
TP52	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	口唇下に3本の串状工具による連続刺突文 下位に横回転の単節縄文RL	TM 6	
TP53	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	横走する2条の竹管による押引文	TM 7	PL 6
TP54	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄橙	横回転の単節縄文RL	TM 7	
TP55	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	単節縄文RLに結節第1種縦回転	TM 7	
TP56	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	複合口縁下端を隆帯状にして指頭押圧と附加条圧痕 下位は附加条二種	TM 5	PL 6
TP57	弥生土器	広口壺	長石・石英	褐灰	棒状工具による2段の横位波状文	TM 5	
TP58	弥生土器	広口壺	長石・石英	にぶい黄橙	複合口縁下端に棒状工具による連続する押圧 下位に細い無節縄文Rの附加条一種横回転	TM 5	PL 6
TP59	弥生土器	広口壺	長石・石英	にぶい橙	外反する口唇外面に連続する押圧	TM 5	
TP60	弥生土器	広口壺	長石・石英	にぶい黄橙	口唇に縄文押圧 複合口縁下端に連続する指頭押圧 下位に3本櫛歯による横位の波状文	TM 6	PL 6
TP61	弥生土器	広口壺	長石・石英	にぶい橙	口唇に細い棒状工具による割目、複合口縁下端にやや太い棒状工具による連続する押圧	TM 7	PL 6
TP62	弥生土器	広口壺	長石・石英	黒褐	口唇外面に無節縄文R横回転後下位に連続指頭圧痕	TM 7	
TP63	弥生土器	広口壺	長石・石英	黒褐	横走する櫛目と3本櫛歯による三角モチーフ 胴部は単節縄文LR	TM 5	PL 6
TP64	弥生土器	広口壺	長石・石英	橙	3本櫛歯による横位と斜位の櫛描文	TM 5	PL 6
TP65	弥生土器	広口壺	長石・石英	にぶい褐	無節無節縄文Rの附加条二種(附加1条) 上半は横回転 下半は縦回転	TM 5	
TP66	弥生土器	広口壺	長石・石英	褐	細い無節縄文Rの附加条二種(附加1条) 軸は太目の無節縄文R	TM 7	
TP67	弥生土器	広口壺	長石・石英	にぶい赤褐	細い無節縄文Rの附加条二種(附加1条) 軸は太目の無節縄文R	TM 7	
TP68	弥生土器	広口壺	長石・石英	にぶい黄橙	無節縄文Rの附加条二種(附加1条)の縄を上半に縦回転後下半に横回転	TM 7	
TP69	弥生土器	広口壺	長石・石英	黄橙	無節縄文Rの附加条二種(附加1条)の縄を縦位に回転	TM 7	

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徵ほか	出土位置	備考
TP70	弥生土器	広口壺	長石・石英	にぶい橙	附加条二種の結束縄文による羽状構成	TM 7	PL 6
TP71	弥生土器	広口壺	長石・石英	にぶい赤褐	無節縄文Lの附加条二種（附加1条）の縄を右側に縦回転後左側に横回転	TM 7	PL 6
TP72	弥生土器	広口壺	長石・石英	明赤褐	上端は輪積み剥離 上半は無文 下半は無節縄文R横回転	TM 5	
TP73	弥生土器	広口壺	長石・石英	黒褐	無節縄文Rの附加条二種 縦位に回転	TM 6	
TP74	弥生土器	広口壺	長石・石英	にぶい褐	横回転の単節縄文LR	TM 7	
TP75	弥生土器	広口壺	長石・石英	暗オリーブ褐	附加条一種の横回転 中段に横走る条痕	TM 7	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 5	石剣	(18.8)	3.7	2.1	(184.8)	頁岩	先端欠損	TM 6	PL 8
Q 6	鎌	(2.1)	1.4	0.3	(0.6)	砂岩	両面押圧剥離 茎部先端欠損	TM 7	PL 8
Q 7	石匙	1.4	3.0	0.5	1.0	チャート	全面に調整	TM 5	PL 8
Q 8	砥石	21.6	7.1	4.9	1192.0	泥岩	2面使用	表土	
Q 9	砥石	(2.7)	3.4	(1.2)	(16.9)	流紋岩	3面使用	TM 5	
Q10	石核	4.5	4.1	3.7	61.8	チャート	各面に剥離痕	SK11	
Q11	剥片	5.1	3.6	1.7	24.5	瑪瑙	縦長剥片 断面台形状	TM 5	
Q12	剥片	3.9	1.9	0.9	6.2	チャート	縦長剥片 中央に稜	表土	
Q13	剥片	3.8	2.1	1.2	8.1	瑪瑙	縦長剥片 一部に自然面を残す	TM 5	
Q14	剥片	3.8	2.5	0.6	5.9	チャート	縦長剥片 中央に稜	TM 5	
Q15	剥片	3.5	1.9	1.2	5.9	瑪瑙	縦長剥片 一部に自然面を残す	TM 6	
Q16	剥片	2.5	1.9	1.5	5.6	チャート	一部に自然面を残す	TM 7	
Q17	剥片	3.9	1.6	0.7	3.0	瑪瑙	縦長剥片 一部に自然面を残す	TM 7	

番号	器種	径	長さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP42	紡錘車	(3.7)	1.6	-	(11.8)	長石・雲母	にぶい橙	外面ナデ 孔内面わずかに磨滅	東覆土上層	

第4節 ま と め

1 はじめに

調査の結果、縄文時代の土坑4基、弥生時代の竪穴建物跡1棟、古墳時代の古墳3基、江戸時代の土坑1基、半地下式土坑2基などを確認した。ここでは、確認できた遺構と遺物について時代ごとに概観し、若干の考察を加えてまとめとしたい。

2 縄文時代

縄文時代の遺構は土坑4基である。時期的には、早期のものが1基、前期のものが2基、中期のものが1基である。調査区が狭いため断定することはできないが、当遺跡は、周辺に営まれた集落の中心から離れた場所に位置しているか、あるいは長い期間を空けて訪れる狩猟場であった可能性を示している。

この時代の遺跡の消長を推測するために、時期ごとの土器片数をまとめた。土器片の総数は646点で、時期別の内訳は下表のとおりである。

愛宕山古墳群出土縄文土器破片数

早期	前期	中期	後期	不明
56	147	68	17	358

3 弥生時代

弥生時代の遺構は竪穴建物跡1棟だけである。しかし、他の時代の遺構からも弥生土器の破片が少なからず出土していることは、当遺跡を含めた周辺まで、愛宕町遺跡の弥生時代の集落が延びていたと考えられる。

土器の頸部片に施された櫛描文は、確認できるものは全て3本櫛歯であることから、東中根I式並行の時期と考えられ、弥生時代後期前半に位置付けられる。

遺物が弥生時代後期前半に属するものを主体としてそれ以前のもの無く、後期後半に属するものが少数確認されている。従って、弥生時代の集落が営まれるようになったのは、後期前半の時期からと見られる。

土器片の総数は483点で、部位ごとの内訳は下表のとおりである。確認した竪穴建物跡の数と比べて、破片数が多いことから、当遺跡周辺に弥生時代に集落が営まれていたことが推測できる。

愛宕山古墳群出土弥生土器破片数

口縁部	頸部	胴部	底部
15	46	405	17

4 古墳時代

(1) 古墳について

3基の古墳は、いずれも周溝の一部だけが検出され、部分的な調査にとどまったものの、その形状から全て円墳と推定される。墳丘及び墳丘下の旧表土までは全て削平されており、墳丘下の旧表土も攪乱によ

り失われていたため、古墳に伴う埋葬施設等の遺構は確認されなかった。古墳に伴うと判断されるのは埴輪だけである。

古墳の築造年代を判断する手がかりが少ないので、周溝の覆土のテフラ分析を実施した。その結果、いずれの古墳も、周溝の覆土に天仁元（1108）年に浅間山から噴出した軽石を含んでおり、攪乱の影響を考慮しても、この時期には周溝は完全には埋没していなかったと考えられる。さらに、第5号墳と第6号墳の周溝覆土から、古墳時代に榛名山から噴出した可能性がある軽石が検出されたが、周溝内に降下堆積したものが、周囲から流れ込んだものか明確でなく、古墳の築造年代を判断する資料とはできなかった。

3基の古墳の時期は、第5号墳については周溝内から出土した土師器から判断したものであり、第6号墳が第5号墳よりも先行するとしたのは、本文中でも述べたように第5号墳の周溝が第6号墳を避けるように掘り込まれた形状を示しているからである。第7号墳については、後述する通り、埴輪によって判断したものである。これら3基の古墳は、第6号墳→第5号墳→第7号墳の順で築造されたと考えられる。3基とも非常に近接した位置に築造されており、群集墳の様相を呈している。愛宕山古墳の近辺に、6世紀代に次々に古墳が築造されたことが分かる。

愛宕山古墳の被葬者は建借間命と伝えられ、それに続く那珂国造の墓所の候補も他に挙げられている¹⁾ことから、これらの古墳の被葬者は、国造の近親者²⁾や、あるいは那珂河流域に広がる水田経営を基盤とする地域集団の有力者等が想定される。

(2) 第7号墳出土の埴輪について

第7号墳から出土した多くの埴輪片のうち、人物埴輪の破片が2点、形象埴輪の破片が2点確認されている。人物埴輪の「腕」は、手首を別に製作した後に嵌めこむタイプで、県央地域ではよく見られるものである³⁾。「手首」には、粘土の貼瘤によって腕飾りを表現してある。貼瘤は6個あり、内2個は上部が欠損している。腕飾りの下に1条の黒線が周回しており、刺青または釧を表現したものである可能性がある。形象埴輪の1点は両面に丁寧なナデが施されており、馬形埴輪の鞍の一部と考えられるが、人物埴輪の鬘の可能性もある。もう1点は、カーブの様子や隆帯の状態から馬形埴輪の尻繫の部分の可能性が

ある。これらの4点を除いて、他は円筒埴輪の破片である。細片が多く、接合できるものが少なかったため、掲載できたものは少なかった。全体の量を把握するために、部位ごとの破片数や重量、底部の残存状況ごとの破片数と重量を計測し、下表にまとめた。

愛宕山古墳群第7号墳出土円筒埴輪破片数

底部の残存状況

口縁部		胴部		底部		1/8未満		1/8～1/4		1/4～1/2	
破片数	重量(g)	破片数	重量(g)	破片数	重量(g)	破片数	重量(g)	破片数	重量(g)	破片数	重量(g)
53	443	1452	10,007	44	2,862	29	1263	14	962	1	637

埴輪の各破片の胎土にはあまりばらつきがないことから、産地は1か所または2か所と推定される。久慈河流域や県南地域の埴輪とは胎土が異なる。また、焼成の程度に違いがあるものの黒斑等が認められないことから、窯窯で焼成されたものと考えられる。円筒埴輪の凸帯が低いので、古い時期ではないとみら

れる。

形象埴輪は、ひたちなか市馬渡や茨城町小幡北山の埴輪生産遺跡でも製作されており、当古墳では双方から移入されていた可能性がある。双方の操業時期から、時期は6世紀中葉と考えられる⁴⁾。

5 江戸時代

(1) 半地下式土坑について

第1号半地下式土坑は地下式坑を小規模にした形態で、第2号半地下式土坑と同様に、上屋が設置されたものと考えられる。当時、このような施設は各地でいろいろな規模・形態のものが造られて利用されていた。麴を発酵させるために使用された麴室⁵⁾のほか江戸の大名屋敷でも大小の規模のものが設置されていた例が報告されており⁶⁾、「地下室」と呼称されている⁷⁾。

地下室は、地中の温湿度変化が外気よりも小さく、ほぼ一定であることを利用するために設けられたと考えられる。地上にありながら温湿度を一定に保つことができる装置が発明される以前にあっては、最も簡便な方法として採用されていたのであろう。縄文時代の袋状土坑もその例に含まれるとされ⁸⁾、この方法は長い歴史を有しているようである。

当時利用された例として、前述の麴の発酵等大きな温湿度変化を嫌うものがあるほか、食物や根菜類の貯蔵も考えられる。ここでは、両者とも同様の形態であったと推定され、貯蔵・保温等を主な目的とした施設として古泉分類における第I群⁹⁾とするのが妥当であると思われる。

第1号半地下式土坑の階段は、ロームを掘り残しただけで何ら補強がなされた様子が見られないにもかかわらず、あまり崩れていない。このことから、この遺構には頻繁には出入りしていなかったと見られ、利用は長期間に及んだものではなかったと判断される。

(2) 第1号半地下式土坑出土の花生け（掛花瓶、水盤）、植木鉢について

第1号半地下式土坑出土の遺物は、日常雑器としての陶磁器・瓦質土器が中心であるが、花生けと火鉢を転用した植木鉢のような趣味を目的とした器もある。

掛花瓶は、断面に当時の接着剤が付着している部分と、何も付着していない部分がある。接着剤が付着している部分は、所有者が割れた掛花瓶を接合した痕跡と考えられる。修復が目的であれば、より強力な接着力を持つ「焼き継ぎ」が行われたであろうから、これは所謂「漆継ぎ」の痕跡であると考えられる。金や銀は見られないので、金継ぎ等がなされたか否かは不明であるが、「風趣」をより深めることを目的として、所有者が意図的にそのような行為を行ったと考えるのが自然である。接着剤が付着していない断面は最後に割れた部分で、修復をしないで廃棄されたために何も付着していないと推測される。

水盤と植木鉢は、植物を飾ったり育てたりするための器である。水盤には花を飾り、植木鉢で草花や盆栽を育てて、季節ごとに床の間や玄関などに置かれて来客の目を楽しませたのであろうか。

これら3点は、18世紀後半から19世紀初頭のこの地に、趣味の器を所有し、花などの植物を飾って生活に潤いを与え、同時に来客の目を楽しませようとする人物がおり、一方では客として訪問した際にその風趣を受け入れることができる人々がいたことを物語る遺物である。

6 おわりに

以上、愛宕山古墳群の調査結果について、時代ごとに概観してきた。愛宕山古墳群は、従来「愛宕山古墳・姫塚古墳・馬塚古墳・狐塚古墳」の4基の古墳が知られていたが、今回の調査で新たに3基の古墳の存在が明らかになり、古墳群の様相の一端が判明した。今後、愛宕山古墳群の研究がすすめられ、全体像が明らかになることを期待したい。

また、愛宕山古墳群と重複する愛宕町遺跡の範囲が今回の調査区まで延びている可能性が高く、さらに縄文時代早期から、江戸時代までの長期に及ぶ複合遺跡であることが分かった。将来、時期ごとの様相が明らかになり、この地域の歴史が解明されることを併せて期待したい。

註

1) 茨城大学人文学部考古学研究室「常陸国那賀郡家周辺遺跡の研究－報告編－」『茨城大学人文学部考古学研究報告』11冊
2014年3月

2) 例として姫塚は建借間命妃が葬られた墳墓とされる。

3) 茨城県立歴史館首席研究員 小澤重雄氏の御教示による。

4) 註3に同じ

5) 古泉弘編『江戸の暮らしの考古学』吉川弘文館 2013年12月

6) 『東京大学構内遺跡調査研究年報1 1996年度』東京大学埋蔵文化財調査室 1997年3月

7) 古泉弘「地下室」『図説 江戸考古学研究事典』江戸遺跡研究会編 2001年4月

第1群:平面形が方形、隅丸方形もしくは楕円形を呈し、主体部の幅と奥行の比率が比較的小さい(1対1に近い:筆者註)。出入口は階段斜面を削り出すか、天井部を開孔するなどし、直接主体部に接続する場合が多い。

8) 註7に同じ

9) 註7に同じ

付 章

水戸市愛宕山古墳群周溝埋積土のテフラ分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

茨城県水戸市に所在する愛宕山古墳群は、那珂川中流域右岸に分布する中位段丘上に位置する。中位段丘は、南関東の武蔵野面群に相当するとされている（貝塚ほか編，2000）。今回の発掘調査では、3基の古墳周溝が検出されており、土層の断面が作成された。

本報告では、周溝の埋積土より火山灰（テフラ）を検出することにより、その給源と噴出年代を明らかにして、埋積土の年代および古墳の築造年代について検討する。

2 試料

試料は、愛宕山古墳群を構成する TM 5、TM 6、TM 7 の 3 基の古墳の周溝埋積土断面より採取された。各周溝の断面中央部の埋積土層は、発掘調査所見により上位より 1 層から 3 層まで分層されている。1 層および 2 層は、黒色を呈するシルト質の黒ボク土であり、2 層は 1 層よりも色調がやや明るい。3 層は、暗灰褐色を呈する黒ボク土であり、褐色のいわゆるローム粒を比較的多く含む。

3 基ともに、試料は厚さ 5 cm で連続に採取されているが、各地点における試料番号と試料数および採取層位は以下の通りである。TM 5 では、試料番号①～⑨までの 9 点が採取され、試料番号①～⑤が 1 層、試料番号⑥・⑦が 2 層、試料番号⑧・⑨が 3 層である。TM 6 では、試料番号①～⑫までの 12 点が採取され、試料番号①～④が 1 層、試料番号⑤～⑩が 2 層、試料番号⑪・⑫が 3 層である。TM 7 では、試料番号①～⑩までの 10 点が採取され、試料番号①～⑦が 1 層、試料番号⑧～⑩が 3 層である。

分析には、処理前の観察により、軽石と思われる径 0.5 ～ 1.0mm 程度の灰色を呈する碎屑物が認められた試料をまず選択した。選択した試料は、TM 5 の試料番号⑥（2 層）、TM 6 の試料番号⑩（2 層）、TM 7 の試料番号⑦（1 層）の 3 点である。次に軽石の認められない層位の試料について、TM 6 の試料番号④（1 層）、TM 7 の試料番号①（1 層）および試料番号⑨（3 層）の 3 点を選択した。分析試料数の合計は 6 点である。

3 分析方法

試料約 20g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分である Y 字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

4 結果

結果を表1に示す。スコリアはいずれの試料においても認められない。火山ガラスは、TM 5の試料番号⑥(2層), TM 6の試料番号④(1層), TM 7の試料番号①(1層), 試料番号⑦(1層), 試料番号⑨(3層)の各試料に極めて微量含まれる。これらのうち、TM 5の試料番号⑥(2層)には無色透明のバブル型と褐色を帯びたバブル型および無色透明の軽石型が混在し、TM 7の試料番号①(1層)と試料番号⑨(3層)には無色透明のバブル型と無色透明の軽石型が混在、TM 6の試料番号④(1層)とTM 7の試料番号⑦(1層)には無色透明のバブル型のみが認められた。

表6 テフラ分析結果

地点名	層名	試料番号	スコリア	火山ガラス		軽石		
			量	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径
TM 5	2	⑥	-	(+)	cl·bw,br·bw,cl·pm	(+)	GBr·sb,W·sg	0.8
TM 6	1	④	-	(+)	cl·bw	+	GBr·sb (opx)	0.8
	2	⑩	-	-		(+)	(ho) ,W·sb	1.5
TM 7	1	①	-	(+)	cl·bw,cl·pm	(+)	GBr·sb (opx)	1.0
		⑦	-	(+)	cl·bw	-		
	3	⑨	-	(+)	cl·bw,cl·pm	-		

凡例 - :含まれない. (+) :きわめて微量. + :微量. ++ :少量. +++ :中量. ++++ :多量
 cl:無色透明. br:褐色. bw:バブル型. md:中間型. pm:軽石型
 GBr:灰褐色. W:白色.
 g:良好. sg:やや良好. sb:やや不良. b:不良
 (opx) :斜方輝石斑晶包有. (ho) :角閃石斑晶包有. 最大粒径はmm.

軽石は、TM 6の試料番号④(1層)には微量、TM 5の試料番号⑥(2層)、TM 6の試料番号⑩(2層)、TM 7の試料番号①(1層)の各試料には極めて微量含まれる。TM 6の試料番号④(1層)の軽石とTM 7の試料番号①(1層)の軽石は、同様の特徴を示し、最大径は約1.0mm、灰褐色を呈し発泡やや不良、斜方輝石の斑晶を包有するものも認められる。TM 5の試料番号⑥(2層)の軽石は、最大径約0.8mm、上述した灰褐色で発泡やや不良の軽石と白色で発泡やや良好の軽石とが混在する。TM 6の試料番号⑩(2層)の軽石は、最大径約1.5mm、白色を呈し発泡不良なものと同色で発泡やや不良なものとの混在する。発泡不良の軽石は角閃石の斑晶を包有する。なお、前述したようにTM 7試料番号⑦(1層)には軽石と思われる碎屑物が認められたが、分析処理後の砂分の観察では軽石を認めることができなかった。砂分の状況から、軽石様の碎屑物は、粗粒の風化した斜長石粒であると考えられる。

5 考察

TM 5の試料番号⑥(2層)、TM 6の試料番号④(1層)およびTM 7の試料番号①(1層)の3点に認められた灰褐色の軽石は、色調と発泡度および包有する斑晶鉱物の種類から、平安時代の天仁元年(1108年)に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B:新井, 1979)に由来すると考えられる。各地点各土層における

この軽石は微量または極めて微量であり、この産状により、検出された層位がそのテフラの降灰層準を示している可能性は低い。おそらく、周溝内に降下堆積した後に攪乱を受け、埋積土層中に拡散してしまったことが考えられる。また、周溝周囲からの土壌の流れ込みによる、周溝内でのテフラの再堆積もあったと考えられる。

一方、TM 5の試料番号⑥（2層）とTM 6の試料番号⑩（2層）で極めて微量検出された白色の軽石は、その色調と発泡度および包有する斑晶鉱物の種類から、古墳時代に榛名火山から噴出したテフラに由来する可能性がある。古墳時代に榛名火山から噴出したテフラは、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA）および榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP）の2種類のテフラが確認されている（新井，1979；早田，1989；町田・新井，2003）。Hr-FAは火砕流の噴出を主体とする活動であり、分布域は給源から東方に広がり、遠隔地では細粒の火山ガラスを含むことを特徴とする。Hr-FPは軽石噴火を主体とする活動であり、その分布軸は北東方向に向いており、遠隔地においても軽石として認められている（早田，1989）。なお、Hr-FAの噴出年代は5世紀末から6世紀第1四半期ぐらいまで（坂口，1993；中村ほか，2008）、Hr-FPのそれは6世紀第二四半期頃（坂口，1993）とされている。

愛宕山古墳群の位置する水戸市付近は、いずれのテフラの分布も明瞭ではなく（例えば町田・新井（2003）など）、検出された軽石も粒径は小さくかつ極めて微量であることから、いずれのテフラに由来するかも判断することはできない。また、この軽石についても、周溝内に降下堆積したテフラの攪乱によるものと周溝周囲の土壌の流れ込みに伴うものとの両者の可能性があると考えられる。前者の場合であれば、古墳の築造年代はテフラの降灰より前となるが、後者の場合は、古墳の築造年代はテフラの降灰より後でも起こり得る。したがって、現時点では榛名火山を給源とする古墳時代のテフラに由来する軽石を検出することはできたが、それを年代資料とするには至らない。

なお、TM 6の試料番号⑩（2層）以外の各試料に認められた火山ガラスのうち、無色透明のバブル型火山ガラスは、その特徴的な形態から、台地表層のローム層中に含まれていると考えられる始良Tn火山灰（AT：町田・新井，1976）に由来する可能性が高い。ただし、TM 5の試料番号⑥（2層）には、褐色を帯びたバブル型火山ガラスも認められたことから、無色透明のバブル型火山ガラスの中には、台地上の黒ボク土層中に含まれていると考えられる鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah：町田・新井，1978）に由来する火山ガラスも混在していると考えられる。無色透明の軽石型火山ガラスについては、水戸市付近のテフラの産状から、ローム層最上部に含まれていると考えられる浅間火山を給源とする立川ローム層上部ガラス質火山灰（UG：山崎，1978）かあるいは同様にローム層最上部付近に含まれている男体山を給源とする七本桜軽石（Nt-S：須藤・山崎，1980など）に由来する可能性がある。このことから、検出された火山ガラスについては、古墳の築造年代に関わる資料とはならない。

上記の検証を踏まえ、各古墳の築造年代についてまとめると、各古墳の試料からはAs-Bに由来すると考えられる軽石が検出されていることから、築造年代が平安時代以前であることは確実であると思われる。また、TM 5およびTM 6の試料からはHr-FAおよびHr-FPのいずれかに由来する可能性がある軽石が確認されていることから、6世紀第1四半期以前の築造である可能性があるが、周溝周辺に堆積する土壌の流れ込みによるテフラの再堆積も考えられることから断定は難しい。また、各古墳の試料からは火山ガラスも検出されたが、これについては上述したように古墳の築造年代に関わる資料とはならない。今後、愛宕山古墳群の古墳の周溝埋積土層の中で、古墳時代の榛名火山のテフラの同定と降灰層準の推定が可能な分析結果が得られることがあれば、古墳の築造年代に関わる資料となることが期待される。

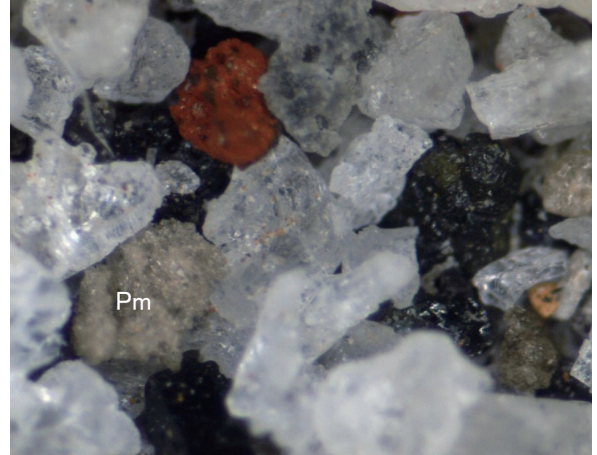
引用文献

- 新井房夫 1979 関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層 考古学ジャーナル 157,41-52
- 貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦編 2000 日本の地形4 関東・伊豆小笠原 東京大学出版会 349p
- 町田洋・新井房夫 1976 広域に分布する火山灰-始良 Tn 火山灰の発見とその意義-科学 46,339-347
- 町田洋・新井房夫 1978 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ-アカホヤ火山灰, 第四紀研究 17,143-163
- 町田洋・新井房夫 2003 新編 火山灰アトラス, 東京大学出版会 336p
- 中村賢太郎・早川由紀夫・藤根 久・伊藤 茂・廣田正史・小林紘一 2008 ウィグルマッチング法による榛名洪川噴火の年代決定(再検討) 日本第四紀学会講演要旨集 38,18-19
- 坂口一 1993 火山噴火の年代と季節の推定法, 新井房夫編 火山灰考古学, 古今書院, 151-172
- 早田勉 1989 六世紀における榛名火山の二回の噴火とその災害, 第四紀研究, 27,297-312
- 須藤茂・山崎正夫, 1980 男体火山活動末期における斜め噴火と異種のマグマ連続噴出 火山第2集, 25,75-87
- 山崎晴雄 1978 立川断層とその第四紀後期の運動 第四紀研究 16,231-246

図版1 砂分の状況・軽石



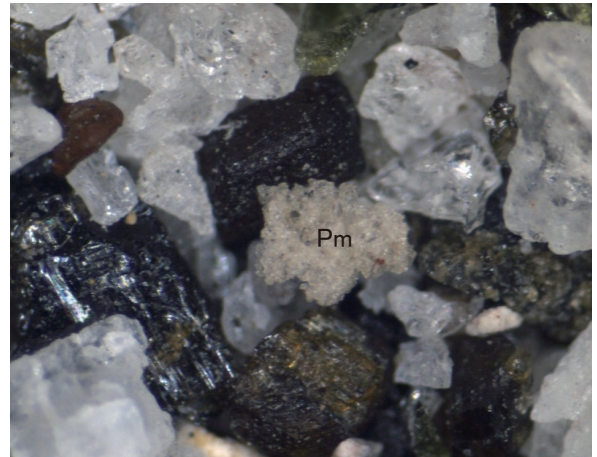
1.砂分の状況(TM5 試料番号⑥:2層)



2.As-Bの軽石(TM6 試料番号④:1層)



3.Hr-FA/FPの軽石(TM6 試料番号⑩:2層)



4.As-Bの軽石(TM7 試料番号①:1層)



5.砂分の状況(TM7 試料番号⑦:1層)

Pm:軽石.



6.砂分の状況(TM7 試料番号⑨:3層)

1.0mm 0.5mm 1.0mm 1.0mm

写 真 図 版



調査区全景（上空から）



第 5 号 墳
土 層 断 面



第 5 号 墳
完 掘 状 况

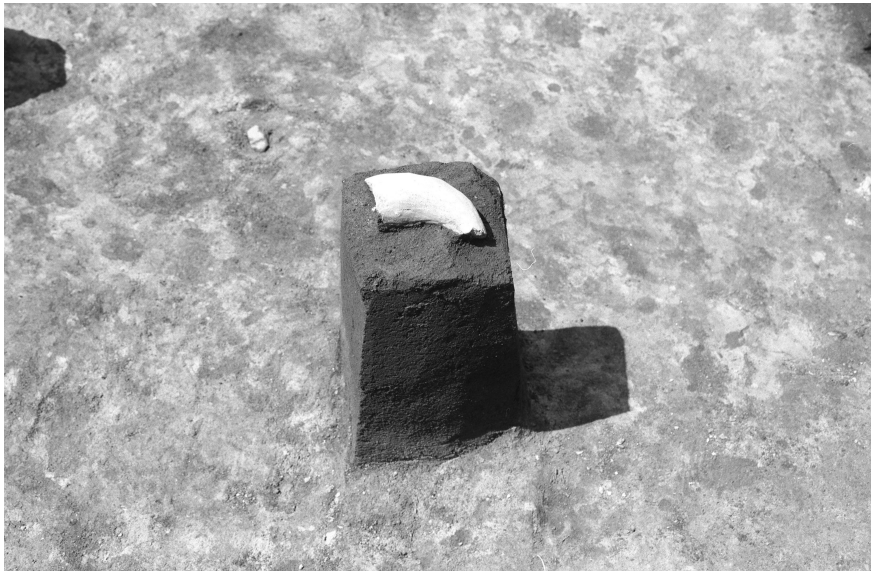


第 6 号 墳
遺 物 出 土 状 况

PL2



第 7 号 墳
遺物出土状況①



第 7 号 墳
遺物出土状況②



第 7 号 墳
完 掘 状 況



第1号竖穴建物跡遺物出土状況



第1号半地下式土坑完掘状況



第2号半地下式土坑完掘状況



第2号土坑完掘状況



第4号土坑完掘状況



第8号土坑完掘状況

PL4



第 1 号竖穴建物跡，第 1 号半地下式土坑，遺構外出土遺物



第1号半地下式土坑-20



第1号半地下式土坑-25



第1号半地下式土坑-23



第1号半地下式土坑-12



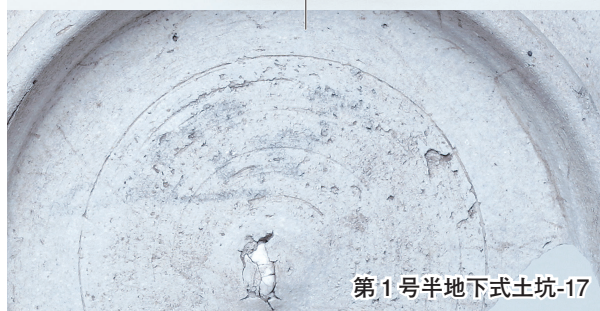
第1号半地下式土坑-27



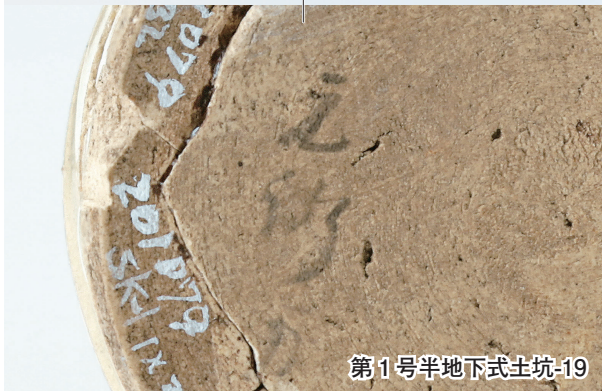
第1号半地下式土坑-14



第1号半地下式土坑-19



第1号半地下式土坑-17

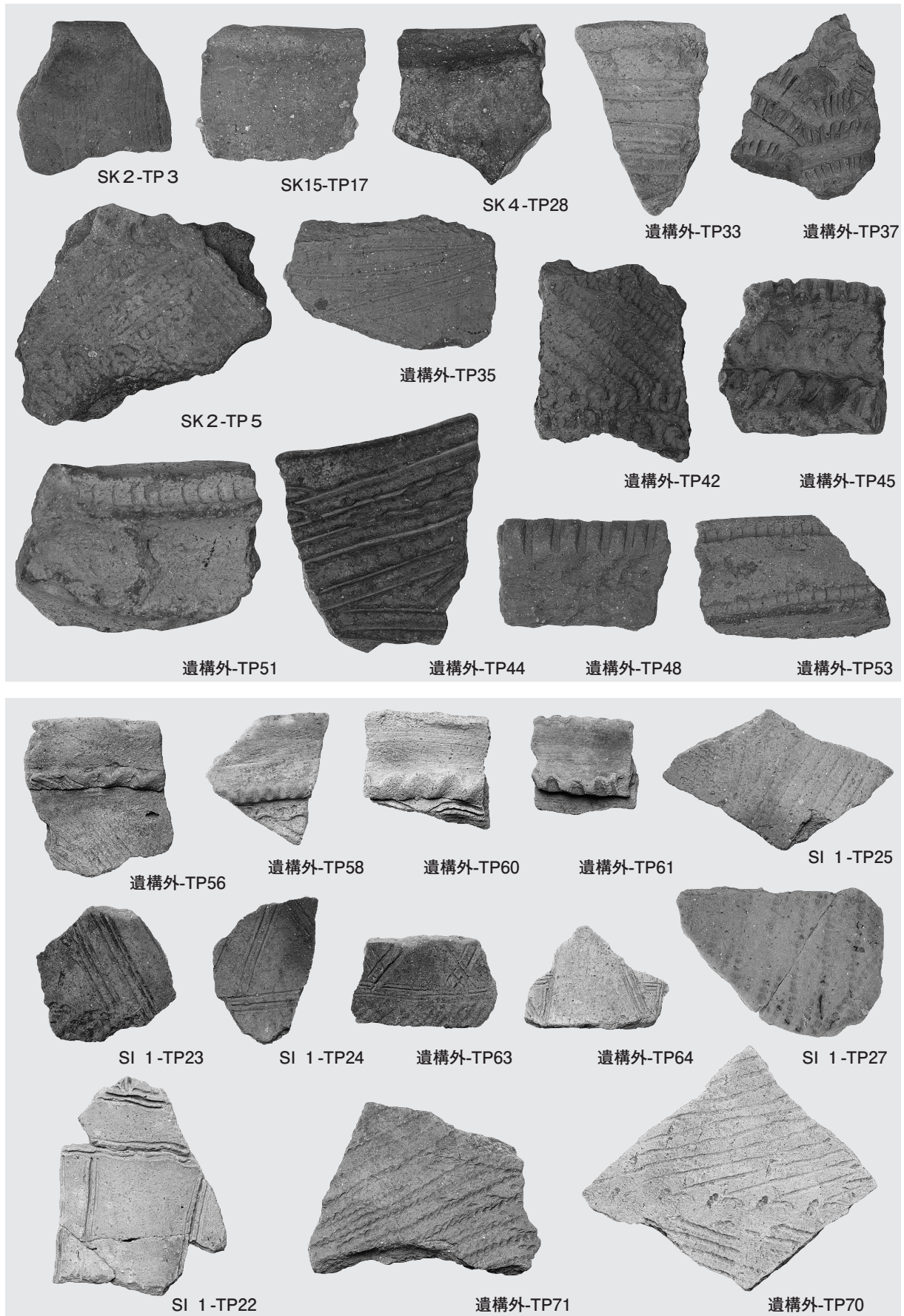


第1号半地下式土坑-19

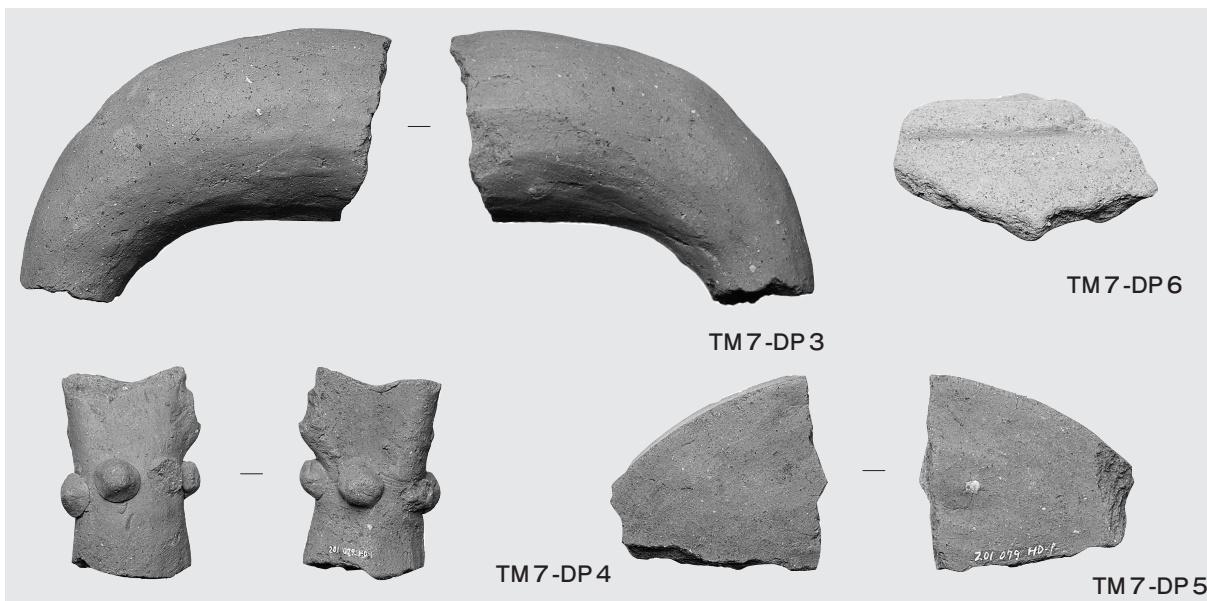


第1号半地下式土坑-18

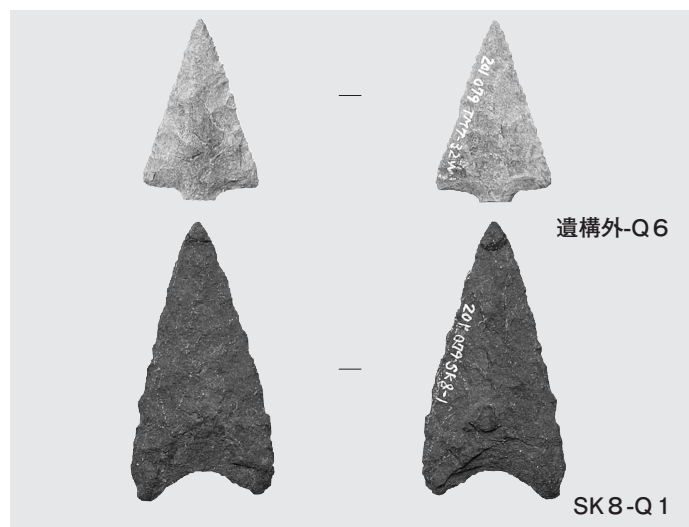
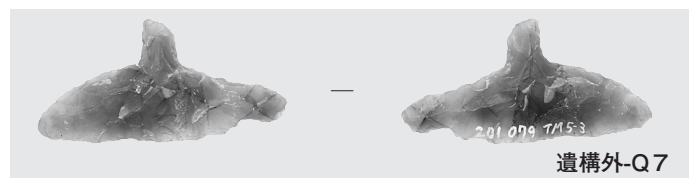
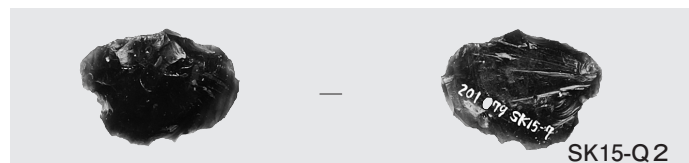
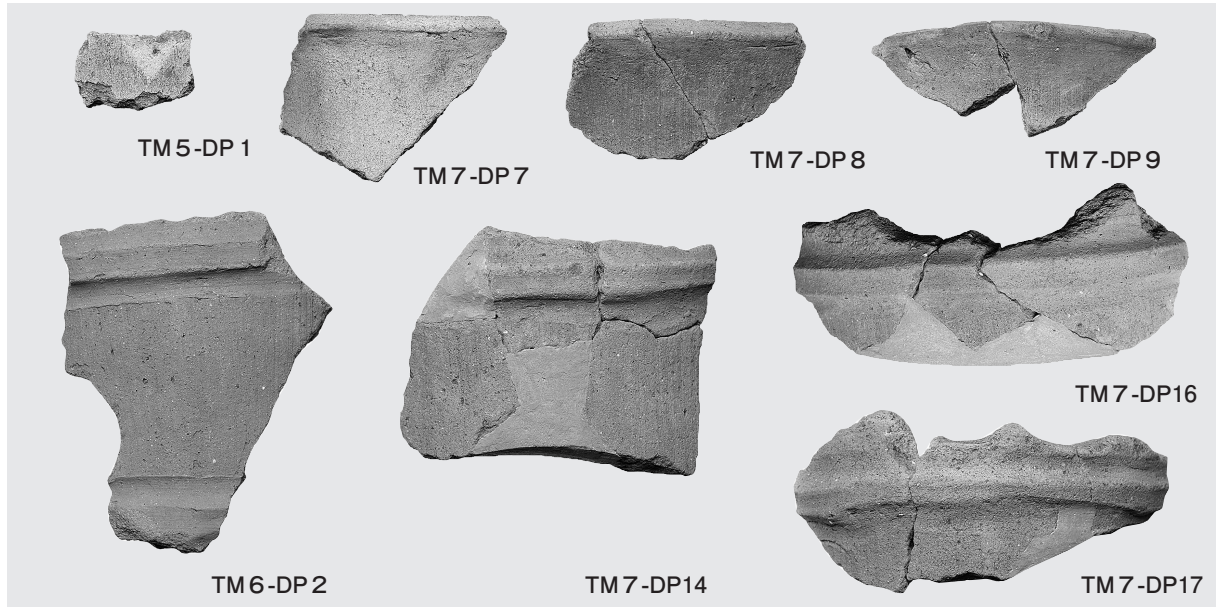
第1号半地下式土坑出土遺物



第2・4・15土坑，第1号竖穴建物跡，遺構外出土遺物



第7号墳出土遺物



第8・15号土坑，第5・6・7号墳，第1号半地下式土坑，遺構外出土遺物

抄 録

ふりがな	あたごやまこふんぐん							
書名	愛宕山古墳群							
副書名	旧水戸生涯学習センター解体撤去事業地内埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第414集							
著者名	根本康弘							
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2016(平成28)年3月18日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
愛宕山 古墳群	茨城県水戸市愛宕 町2,182番地	08201 - 079	36度 39分 49秒	140度 45分 36秒	30 ~ 31m	20140401 ~ 20140531	617㎡	旧水戸生涯学 習センター解 体撤去事業に 伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
愛宕山 古墳群	集落跡	縄文	土坑 4基		縄文土器(深鉢),石器(削器・ 鏃)			
		弥生	竪穴建物跡 1棟		弥生土器(広口壺)			
		江戸	土坑 1基 半地下式土坑 2基		土師質土器(小皿・鉢),瓦 質土器(鉢・火鉢・七厘), 陶器(碗・皿・花生け),磁 器(碗・皿),土製品(土人形・ 置竈) 石製品(硯),銭貨(寛永通寶)			
	墓域	古墳	古墳 3基		土師器(坏・甕),人物埴輪, 形象埴輪,円筒埴輪			
その他	時期不明	土坑 8基		縄文土器(深鉢),弥生土器 (広口壺),土師質土器(小 皿),土製品(紡錘車),石 器(石匙・磨石・砥石),石 製品(石剣)				
要約	当遺跡は、縄文時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。古墳時代に築かれた3基の古墳は、全体を調査していないものの、全て円墳と推定される。時期は、いずれも6世紀に属すると考えられ、第6号墳は第5号墳に先行すると見られる。							

印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 7 Home Premium ServicePack1
	編集	Adobe InDesign CS6
	図版作成	Adobe Illustrator CS6
	写真調整	Adobe Photoshop CS6
	Scanning	6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000
	図面類	EPSON ES-10000G
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷		印刷所へは、Adobe InDesign CS6でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第414集

愛宕山古墳群

旧水戸生涯学習センター解体撤去
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成28（2016）年 3月15日 印刷

平成28（2016）年 3月18日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

HP <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 (有)川田プリント

〒310-0041 水戸市上水戸4丁目6-53

TEL 029-253-5551